

經の人心惟危。道心惟微に本く、象山乃ち語を次ぎて曰はく、自人而言。則曰惟危。自道而言。則曰惟微。更に其の危きと微なるを解して曰はく、罔念作狂。克念作聖。非危乎。無聲無臭。無形無體。非微乎。此く道心人心の唯一體觀察の方面の異なるに從て二様となるとなす者、明道、上蔡に異なる所、況んや伊川をや、況んや朱子をや。以爲らく、天理人欲を分つは、此れ天人一體の觀念を破する所以、乃ち其の誤謬を破して曰はく、

天理人欲之分。論極有病。自禮記有此言。而後人襲之。記曰。人生而靜。天之性也。感於物而動。性之欲也。若是則動亦是。靜亦是。豈有天理物欲之分。動若不是。則靜亦不是。豈有動靜之間哉。全集三十三、五、六十二。

と、以爲らく、天理を以て靜となし、人欲を以て動となす。然るに動靜皆性に出づるに非ずや、則ち何ぞ一を以て是となし、一を以て不是となすを得むや、且つ靜を以て天性となさば、動獨り是れ天性にあらざるかと。然り而して從來の學者は皆天理を以て道心となし、人欲を以て人心と

なせり。象山に於て道心人心の別なく、天理人欲の別なく、唯動と靜とを該ぬる所の一心あるのみ、然らば則ち其所謂心なる者は果して何ぞや。

第三款 心即理

佛に見性成佛を説く、象山が心を説く、又頗る之に似たり、次に引用する所は最も善く此の觀念を表はせる者

論語中多有無頭柄的說話。如知及之。仁不能守之。類不知所及。所守者何事。如學而時習之。不知時習者何事。非學有本領。未易讀也。苟有本領。則知之所及者。及此也。仁之所守者。守此也。時習之。習此也。說者說此。樂者樂此。如高屋之上。建砥水矣。

象山の所謂此とは此心を指すなり、故に彼れ宛然禪家と同一の口吻を用ひて曰はく、道理只是眼前道理。雖見到聖人田地。亦是眼前道理。同心を以て一箇至大の者、理を具ふる者となせり、義理之在人心。實天之所與。而不可泯焉者也。全集三十二、七。然らば則ち義理と心と二なるか、曰はく、何んぞ然

らむ、義理は此の活動の様式に外ならず、蓋皆信人之所固有、心之所同然也。同、心即理與李と云ふべきのみ、然り而して此の理や、自然の理、自然の理に循ふ、内外表裏の別あらむや全集三十、是れ彼自ら立つ所の地、人、其の晦翁と辯するを諫めし時、建安亦無朱晦翁、青田亦無陸子靜全集七、と云ふ所以なり。

然らば即ち個人相異なる所以、何を以てするか、曰はく氣質の異なるを以てのみ、氣質偏弱則耳目之官、不思而蔽於物、物交物則引之而已、由是向之所謂、忠信者、流而放僻邪侈、而不能以自反矣、當是時、其心之所主、無非物欲而已矣全集三、思へらく心は其の固有の法則に従て活動せんとするも、耳目が物欲に蔽はるゝため、完全に自己を實現すること能はざるのみ、以て朱子と如何に此點に於て異なるかを見るべきなり。即ち朱子は理論として、氣質本然の二性を立し、一樣に理論として、重んぜらるれども、陸子は心即理にのみ、重きを措きて、此れを攪亂する者は、常識の氣質、又は耳目たりとなすなり。

第四節 工夫論

第一款 窮理の意義

窮理の意義は實に象山に於いて始めて明かなり、其の然る所以は理即心、心は一耳の主義あるを以てのみ、象山以爲らく所謂窮理、所謂格物皆自己の田地を開耕するに外ならず、故に我に添加する所なく、唯自ら有する所を意識するに至るのみ、故に吾れ六經を註するに非ずして六經皆我が註脚なり全集三、此れ自家と他と異なる所、曰はく、

吾之學問與諸處異者、只是在我、全無杜撰、雖千言萬語、只是覺得他底、在我、不會添一些、近有議吾者、云除了先立乎其大者一句、無伎倆、吾聞之、曰、誠然全集三、

と、然り而して心の善を發揮するには、物欲を除却するに在るのみ、故に曰はく、今之論學者、只務添人底、自家只是滅他底、此所以不同全集三、と、象山が工夫の要義は實に此に在り、又曰はく、格物者格此者也、伏羲仰象俯

法亦先於此盡力焉耳。不然所謂格物末而已矣。全集三十一、五十六、六十六、此とは此心なり。

第一款 思之

象山曰はく、自立自重不可隨人脚跟。學人言語全集三十三、四十三、此れ彼れが學風の一般を見るべし。然らば人の脚跟に従はず、人の言語を學ばず、如何んして可なるか。曰はく、義理之在人心、實天之所與而不可泯滅焉者也。彼其受蔽於物、而至於悖理違義、蓋亦弗思焉耳。誠能反而思之、則是非取舍、蓋有隱然而動、判然而明、決然而無疑者矣。全集三十七、七十七、と、彼れ常に學者を教へて曰はく、各自圓滿具足の者小缺なし、故に唯自立を要するのみと、又更らに痛快なる筆を以て曰はく、

人嘗先理會所以爲人、深思痛省、枉自泊沒、虛過日月、明友講學、未說到這裏、若不知人之所以爲人、而與之講學、遺其大、而言其細、便是放飯流歎、而問無齒決、若能知其大、雖輕自然反、輕歸厚、因舉一人恣情縱欲、一知尊德樂道、便明潔白直。全集三十一、五十三、三十一

と、象山の實學即ち此に在り、古人皆是明實理、做實事。全集三十四、三十五、と曰ふ、決して虚言ならず、心之在人、是人之所以爲人、而與禽獸草木異焉者也。可放而不求哉。全集三十二、三十三、我が本心に具備する所之を得むこと本と思ふに在るのみ。

第五節 結論

要之象山の直截簡易なる學風は當時の時勢及び學風に對する反働にして其の心即理の觀念は窮理と實踐とを結合する所以、所謂窮理格物とは自己の本心を自覺するに外ならざるのみ、而して此の本心の大且つ重なるを意識せしむるを以て、入學の初門となす。凡物必有本末、且如就樹木觀之、則其根本必差大、吾之教人、大槩使其本常重、不爲末所累、然今世學者、却不悅此。全集三十九、四十、此一語以て彼れが教育の方針と時勢の風潮如何とを察す可きなり。象山歿し繼ぎて起れる者、見るべき者二あり、一を門人楊慈湖となし、一を明の王陽明となす。

張南軒

張南軒名は敬夫字は拭、南軒は其の號なり、吏部侍郎となる、朱子と親交あり、其の父は魏の忠獻公張浚なり、張浚朝に仕へ、左右の相に至る、國に許すの心白首まで渝らず、時に金人屢々中原を奪ひ、宋の社稷に逼まる、秦檜の徒、専ら和議を主張す、張浚此れより先き、數々邊軍に赴き、志中原を恢復するに在り、終身和議を主とせず、未だ就らずして卒す、其の二子拭と杓とに遺命し、中原を恢復し、國耻を雪ぐ能はざりしを以て、先人の墓に耐葬するなきを以てす、著書易解、雜說十卷、書、詩、禮、春秋、中庸の解、文集十卷、奏議二十卷等あり、拭は其子なり、嘗て王大寶を師とし、又胡五峯に學ぶ、然れども、五峯の説を奉せず、龜山より上二程を尊信す、淳熙七年四曆一千卒す、文集あり、其の所謂義利の辯なる者なる者、古來以て名言となす、曰はく、

學者潛心孔孟、必求其門而入、以爲莫先於明義理之辨、蓋聖賢無所爲而

然也、有所爲而然者、皆人欲之私、而非天理之所存、此義利之分也、自未知省察者言之、終日之間、鮮不爲利矣、非特名位貨殖而後爲利也、意之所向、一涉於有所爲、雖有淺深之不同、而其爲徇己自私、則一而已、文集と爲めにする所ありて爲す者は利爲めにする所なくしてする者は義以爲らく、倫理的行爲の善否は其の行爲にあらずして其の動機に在り、動機利に出んか、是れ不善なり、義に出んか、是れ善なり、此れ「カント」の説と同一なり、「カント」と南軒とは共に性善説を取る者、倫理的行爲は其の淵源を純粹主觀に有するとなす、故に其の言も亦相同じきなり。

呂東萊

呂祖謙字は伯恭、東萊に居る、故に人稱して東萊先生と曰ふ、少時性極めて褊なり、後ち病中論語を讀み、躬自厚而薄責于人と云ふに至て省みる所あり、終身暴怒せずと云ふ、林拙齋、汪玉山、胡籍溪三先生に従ふて遊ぶ、朱子、張南軒と友たり、淳熙八年七月、主管明道宮を以て卒す、年四十五、著

はす所、皇朝文鑑、讀詩記、大事記、古周易、書說、閩範、官箴、辨志錄等あり。東萊博議は哲學には關係なければ共、尤も有名なる書なり。東萊朱子と極めて親交あり、其の説大抵程學を墨守するに止まる、然れども其の全體の傾向は朱子よりも實踐的なり、其の古人爲學十分之中九分、是動容周旋洒灑應對、一分在誦說、今之學者全在誦說、入耳、出口了、無涵蓄と痛嘆するを以て其の學風の一般を伺ふべきなり。政事の方面に於ては宛も孔孟の徳教を慕向するもの、曰はく秦漢以來、外風俗、而論政事と、其餘創思特見之れあらざるなり。蓋し張南軒、朱子、呂東萊三人、相友とし、極めて親密に、學必ず、相討論し、說必ず相磨礪し、同きに至て已む、唯二子早く卒し、朱子獨り長命せり、是を以て學者朱子を尙ぶこと泰山北斗の如し。

陳龍川

陳龍川名は亮、字は同父、後名を同と更む、痛く朱學派の空疎に流るゝを

慨し書を作て以て之を駁す、曰はく

爲士以文章行義、自名居官、以政事書判、自顯、各務其實、而極其所至、各有能、有不能、卒亦不敢強也。道德性命之說一興、而尋常爛熟、無所能解之人、自託于其間、以端慤靜深爲體、以徐行緩語爲用、務爲不可究測、以

蓋其所無送眞赴成序

と、人の身後に立ち、性命を談する者を以て灰援となし、睡して顧みず、志す所經濟に在り、深く孝宗の親任する所となり、卒す、年五十五、著はす所酌古論中興論等あり、文集に備はる。

彼れ世儒天理人欲の別を立て、以て王霸の分を説くを慨して曰はく、昔者三皇五帝、與一世共安于無事、至堯而法度始定、爲萬世法程、禹啓始以天下爲家、而自爲之、有扈氏不以爲是也、啓大戰、而後勝之、湯放桀於南巢、而爲商、武王討紂取之、而爲周、武庚挾管蔡之隙、求復故業、諸嘗與武王共事者、欲脩徳以待其自定、周公違衆舉兵、而後勝之、夏周商之制度、定爲三家、雖相因、而不盡同也、五霸之紛々、豈無所因而然哉、老莊

氏思天下之亂無有已時而歸罪于三王而堯舜僅免耳。王者霸者將た何の別あらむ、社會進歩の過程に於て、必然的に夏となり、商となり、周となり、五霸となる。

葉水心

葉水心、名は適、字は正則、水心と號す、永嘉の人、著はす所、水心文集二十八卷、習學記言五十卷、拾遺一卷、別集十六卷あり。葉子亦理學の繁脛なるを厭ひ、先王の道は天下を治むるに在るを明かにせり、ゆゑに彼れ孟子に至りて道絶するの說を排し、曰はく嗚呼道果止于孟子、而遂絶乎、其果至是而復傳邪、孔子曰學而時習之、然則不習而已。と、而して二程以來學者高遠の理に走る、皆易の十翼を以て論據となすものにして、其の直接の動機は佛老の說に對抗せんとするに在り、而して十翼は孔子の作にあらざる以上は、周張二程猶ほ未だ道の本統を得たる者にあらざる所以を辯明せり、曰はく大抵欲抑浮屠之鋒銳、而示吾

所有之道若此、然不悟十翼非孔子作、則道之本統尙晦と、此の言たる實に宋儒に取りて頂門に一針を加ふるが如し、其の効力の大なりしと疑ふ可からざるなり。

附論 朱陸の拆衝

朱子は問學を主とし、陸子は見心を主とす、朱子は未より進み、陸子は本より下る、朱子は繁脛にして、陸子は簡易なり、幟旗堂々、互に張て降らず、時々論戰を交へ、四隣腥然、是に於て呂東萊一計を案じ、二子をして一堂の上に會し、以て雌雄を決せしめんとす、二子之を諾す、此に於て信州鵝湖寺の會あり、呂東萊、陸復齋、劉子澄及び江浙諸友皆會す、時に淳熙二年乙未四月なり。此の會、や實に此れ事功派と學問派との軋轢、豈獨り宋代兩大家の軋轢たるのみならむや。

鵝湖に到るの途上、其の兄復齋と學事を論ず、復齋節を撃て其の可なる

を稱し、一詩を賦して以て象山に示す、其の詩に云はく。

孩提知愛長知欽。古聖相傳只此心。大抵有基方築室。未聞無趾忽成岑。
留情傳註翻秦塞。著意清微轉陸沈。珍重友朋相切磋。須知至樂在于今。
象山第二句泰穩なりとす。途上和韻を期す。既にして一行鵝湖寺に達す。
東萊別後の工夫如何んを問ふ。復齋乃ち前詩を誦す。讀むで第四句に至
る。晦庵曰はく、子壽早已上子靜船了也。已に讀み了りて晦庵之れを辨
ず。象山更に其の和韻を誦して曰はく。

墟墓興哀宗廟欽。斯人千古不磨心。涓流滴到滄溟水。拳石崇成泰華岑。
易簡工夫終久大。支離事業竟浮沈。

と、晦庵俄然色を變ず。象山更らに繼ぎて曰はく。

欲知自下升高處。真僞先須辯古今。

と、晦庵頗る不平の色あり。是に於て衆散して休憩す。明日論議凡そ數十
拆。縦に説き横に辯し、背に出で虚を撞き、遂に決せず。此の如き者連日、晦
庵則ち謂はく、人各々見る所あり。決を後世に取るに如かずと。象山猶ほ

堯舜以前何の書をか讀みしと追究せんとせしが、復齋の止むるに由て
已む。

朱陸は又太極圖説に就いて筆鋒を交へり、此れ象山の兄梭山に始まる、
梭山以爲らく、大極圖説は周子の作にあらず、何んとなれば通書中一無
極の字なければなり。故に周子の作とするも此れ少時の作、通書を作り
し時、已に其の非なるを知ると、且つ謂へらく、易に太極の二字はあれど
も、無極の字なし、太極と言へば足れり。何んぞ無極と云はん、是れ周子の
無極の字を改めし所以なりと、朱子即ち書を作り、第一事は之を等閑に
附し、獨り第二件を把へて書を以て答へて曰はく、不言無極。則太極同於
一物。而不足爲萬化根本。不言太極。則無極淪於空寂。而不能爲萬化根本と。
梭山復た答ふる所あり。朱子亦更に之を駁し、其の書に前書を熟讀せず
して論を立つ、是れ急迫の弊なりとの言あり。梭山朱子の陋を察し、又答
へず。象山に至り、辯難往復更らに劇甚を極む。蓋し事功的精神と學問的
精神とが各猛烈なる勢ひを以て芒鋒を突進せしめむとすと雖も、出立

の方面の同からざるを以て對角線的の衝突あるなきなり。今暫く其の概を云はんか、象山は極を解して中となし、理となし、朱子は至極となせり、故に朱子に取りては無極而太極の句は此の理の形容辭たり、故に曰はく周先生恐學者錯認太極別爲一物、故著無極二字以明之と。陸子に在りては極の字は即ち理の字なり、中の字なり、故に曰はく此理乃宇宙之所固有、豈可言無と。又曰はく蓋極者中也、言無極則是猶言無中也。是奚可哉と。兩子共に理の存在を認めざるにあらざるなり。

兩子の聰明茲に及ばざるは何ぞや、徒らに名義の上に就て連年議論する者、吾人は主義の軋轢が其の間に隱見するを認めずんばあらず。

朱子學派

晦庵の門に及ぶ者蓋し數百人、其の中に就て有名なる者を數へ來れば蔡元定、黃翰、陳北溪、輔廣の徒なり。

一 蔡元定 字は季通、西山と號す、建陽の人、朱子の門に入り、得る所あり、

人に教ふる、性と天道とを以て先きとなす、全く朱子を因襲せる者なり。著はす所、大衍詳説、太玄潜虚指要、洪範解等あり。僞學の禍起りし時、朱子の累に坐して道州に貶せらる。

二 黃翰 字は直卿、勉齋と號す、關縣の人、最も朱子の統を得たりと稱す、著はす所、勉齋文集及び經解あり。

三 輔廣 字は漢卿、潜庵と號す、朱子の文字を反覆して一生を終りしと云ふ。著はす所、語孟學要答問、四書纂疏、六經集解、詩章子問、通鑑集義、潜庵日新錄、師訓篇等あり。

陳北溪 (朱子派)

其一 傳

陳北溪名は淳、字は安卿、龍溪の人、林宗臣見て之を奇とし、授るに近思錄を以てす、北溪退きて之を讀み、朱子其郷に守たるに及び、教を受けんことを請ふ、朱子人に語るに南來陳淳を得たるを喜ぶを以てす、門人疑問

合はざる者あれば、必ず北溪を稱す。北溪陸が王張を學び、禪家の宗旨を用ひて、形氣の虚靈智覺を認めて天理の妙となし、究理格物に由らずして徑ちに上達の境に造らんと欲し、反て聖門に託して以て自ら標榜するを嘆じ、遂に吾が道の體統、師友の淵源、用功の節目、讀書の次序を發明して四章となし、以て學者に示す。嘉定十年歿す、年六十五。著はす、所道學體統四篇、似道似學、大學論語中庸義、字義詳講今日性義、篤谷所聞門人陳沂等聞く等あり。

其二 學說

一心合理氣。朱子は心を以て氣に屬し、而して理を具備體とすと云へり。然れども未だ心を以て一物と見做さず、寧ろ天地間に在りて特別の靈底の物となせり、故に曰はく、惟心無對と、故に彼れ心を以て氣に屬し理を具備すと爲すは之れありと雖も未だ明了なる觀念あることなきなり、是れ理氣の二元より出發しながら心を以て明裁に一物となす能ざるを以てなり、北溪即ち曰はく、

大抵人得天地之理爲性、得天地之氣爲體。

と、乃ち繼ぎて曰はく

理與氣合、方成箇心上、字義

と、此に至り、心其の物の觀念至て明かなり、而して心の活動し得る所以は氣あるがためなりとし、更に進んで理は善氣に善あり、不善ありとなせり。

二、情有善惡。情は朱子の言へる如く性より發生し來るなり、其の説に曰はく、

性中有仁、動出爲惻隱、性中有義、動出爲羞惡、性中有禮智、動出爲辭讓、是非上、字義

と、裏面に此の仁義禮智ありて出で來りて情となる、惻隱羞惡等は情なり、孟子之れを心と言ふは情と性とを統べて心が主たるを以てなり、同情が本性より出で來らず、物欲より來たる時は即ち不善あり、其の説に曰はく、

情之中節。是從本性發來。便無不善。其不中節。是感物欲而動。不從本性發來。便有箇不善。孟子論情。全把做善者。是專指其本於性之發者之言。
上同

と、是れ情に性より發するものと、遮らるゝとありとなすなり。喜怒哀樂及七情是合善惡說。上同と言へる決して異むに足らざるなり。是れ皆朱子の言はむと欲して言ふ能はざりし所を開發せる者なり。
三、太極の本體 太極の本體は圓なり。各物に存在して毫も缺欠の處なし。陳幾叟が日落萬川處々皆圓なりと云へる如し、太極は萬理の總腦する所、故に心も亦一太極と言ふべきなり。下字義此れ蓋し心即理なりと云ふの意なり。

楊慈湖 (陸子派)

楊慈湖名は簡、字は敬仲、慈谿の人、嘗て反觀して天地萬物通爲一體、非吾心外事を知り、象山の富陽に至るを期とし、往きて之を問ふ、忽ち此心澄

然清然なるを覺ふ。嘉定三年寧宗に面奏し、斯心即ち大道なるを説く、寶慶二年卒す。年八十六。慈湖は象山の心即理の觀念を推擴して、一切の法則皆我が心内の事となせり。其の己易一篇は易に所謂天地の運行日月の交代皆自己の範圍内に在る者なりとなすなり。

天地我之天地、變化我之變化、非他物也。

と云ひ、

吾性澄然清明、而非物。吾性洞然無際、而非量。天者吾性中之象、地者吾性中之形。故曰在天成象、在地成形。皆我之所爲也。

と云ふ、吾人をして、フイヒテの絶對自我の論を想起せしむ、彼れ又遂に儒家の範圍に拘束せらるゝと能はず。傲然進んで佛家の域に躍して曰はく、吾未見夫天與地與人之有三也。三者形也。一者性也。亦曰道也。又曰易也。名言之不同、而其實一體なりと、自己の性は即ち易なり。一切の變化事象皆此に求めて足れり。故に易與天地準。易繫辭と云ふは孔子の言にあらざるなり。天地即易、幽明本無。故に必ずしも仰觀俯察而して後其の故

を知るとなさるるなりと、此れ明かに佛教思想を混合する者なりと雖も、黄宗義が所謂學象山而過者亦此に至らざるを得ざるなり。其の他象山の學を傳ふる者を舒廣平となし、袁紱齋となす、廣平は又張南軒に問ふ所あり、紱齋は呂東萊に訪ふ所あり、然れども其の學大概象山を主とす、紱齋曰はく、大哉心乎、天與地一本、精思以得之、兢兢業業以守之、則與天地相似と、此れ象山の學に非ずして何ぞ、廣平の如きも、人之良心、本自明白、特患無所感、一朝省悟、邪念釋除、志慮所關、莫非至善と云ふを以て見れば、明かに象山の學を得たる者なり。

魏鶴山

魏了翁、字は華父、朱子の門人、輔漢卿と友たり、此を以て義理の學に通すと云ふ、鶴山全集に云ふ、開禧中、余始識漢卿于都城、漢卿從朱文公、最久、盡得平生言語文字、每過余、相與熟復誦味、輒移晷、弗去、余既補外、漢卿悉舉以相昇、宋元學案、其蜀に在る一十七年、蜀人義理の學を知るは、鶴山に由る。

學說 其の説に曰はく、聖賢は欲の絶つ可からざるを知るが故に寡欲と云ふも、無欲と言はず、其の奏劄に於て、心者人之太極、而人心又爲天地之太極、以主兩儀、以命萬物、不越諸此と云ひ、陛下謂獨心之外、別有所謂天地神明者乎、抑天地神明不超乎此心也と推論する者、飄忽突底、殆んど朱學の領域を超脱して、湖慈の世界觀に入る、要するに其の説心を以て主となすものなり。

眞西山

眞西山名は德秀、字は景元、後希元と改む、建之浦城の人、學者西山先生と稱す、時に僞學の弊未だ脱せず、大儒の書、顯かに之を禁絶す、西山慨然斯文を以て自ら任じ、黨禁既に解けて、正學天下に明かなるは、實に西山の力に由ると云ふ、著はす所、西山甲乙彙、對越甲乙集、經筵講義等あり。學說 鶴山に在りては、稍々新思想の見るべきありと雖も、西山に至りては、全然程朱を踏襲せる者、當時鶴山と併んで、雙翼の如く、雙輪の如く、

なりしが鶴山識力横絶、眞所謂卓犖觀羣書者。西山則依門傍戶、不敢自出一頭地。蓋墨守之而已と黄百家の評せる、決して見るなしとせず、其の問學只說格物、不說窮理に對へて曰はく、

即形體則有性情之理、精粗本末、初不相離、若舍器而求理、未有不蹈于

空虛之見、非吾儒之實學也。所以大學教人、以格物致知、蓋即物而理在

焉。庶幾學者、有著實用力之地、不致馳心于虛無之境也。宋元學案 八十一、三

朱學の弊や物に就きて客觀的に理を求め、支離滅裂の傾向ある所以を察す可きなり。

第七章 宋の文明結論

此○諸○種○の○學○術○は○繼○起○勃○興○し○之○を○紹○述○傳○唱○す○者○其○の○人○に○乏○し○か○ら○
す○諸○家○の○傳○に○由○社○會○一○般○に○傳○播○せ○ら○れ○殊○に○程○朱○學○は○最○も○勝○利○を○占○め○
り○社○會○公○共○の○物○と○な○れ○り○換○言○す○れ○ば○文○明○の○特○色○の○一○は○程○朱○學○な○り○し○な○
り○

宋の社會は甚しく夷狄の侵入を受けたり、然るに猶ほ學術の盛んなるは、何故ぞや。曰はく、時勢有用の學なるを以てなり。後人或は程朱の徒を以て道學者となし、孔子經綸の意を得たる者にあらずとなす。然れども此れ大なる誤りなり。周子邵子は之を措き、二程以下の學者は一として人格を脩養する所以の工夫に付て思考せざるなきなり。孔子の目的は人格を完全に在り、人格を完全して以て天下を徳化せんとするに在り。然れども人格を完全に在り、所以の道に付て詳かなる工夫を教へたるとなし、宋儒は即ち老佛の影響を蒙り、此の工夫に付て詳かなる研究を遂げたり。此の工夫を實行せんか、以て人格をして完全ならしむべく、人格をして完全ならしめむか、以て社會に用あるべきなり。此れ實に彼れ等の間に横はる考にして、實に日用切實の學なり。恐くは孔子の學よりも實行に切實なるべし。時勢の非なる實に人物を必要とするなり。訓詁の學は迂遠にして學ぶに足らず。此れ宋代の(一)論策、(二)修身學を開きし所以なり。學者或は宋儒を以て孔子の教を毒すとなせども、此れ

孔子の何たるか、宋儒の何たるかを知らざるの言にして、宋儒は實に孔子の忠臣なり。
陳龍川、葉水心等に至りては、固より時勢の必要に感じて、自説を唱へたる者なり。

第八章 人種的社會現象の興起

第一節 諸夷

此の時に當り、異人種の軋轢は最も強く現れたり。支那の漢人種は古より支那の社會其の者なりしが、北方の夷狄は絶へず之れを攻撃せり。三國六朝の時に當り、長城を越へて漢土に入り國を立つる者あり。唐の天下を一統するに及んで、皆服從せり。宋國を建つる頃、北方には契丹、金、蒙古、西夏等の諸夷あり。此れ等の諸夷は人文開けず、只た勇あるのみ。其組織今略之。然るに宋の國を建つるや、始め武人の勢力を抑へんとし、文人を用いたり。故に文人に於いて極めて有名なる者あり。然れども文弱

に流るゝの傾向は免がる可からず。

北方の夷狄は宋を輕んずるの念あり。契丹は屢々來りて兵を構ふ。遂に絹二十万疋、銀十萬兩を與へて和を講ず。之れ實に眞宗の時なり。是より契丹益々宋を輕んせり。然るに契丹燕京に留ると久しく、遂に支那の文明に化せられ、柔弱となれり。

西夏は五代の末より北方の強族たりしが、其主元昊の時に至り、最も強く、最も大となり。諸州を併呑して大夏皇帝と號す。宋の社會を併呑するの氣あり。仁宗の時に至り、大舉して入寇す。宋即ち韓琦、范仲淹を使はして屢之れを破る。後ち銀絹茶綵廿万五千を與へて和を定む。契丹宋が西夏と事あるに乗じて、使を宋に使はし、地を割くを求む。宋依て使を遣し、毎歲銀絹十萬を約して和を定む。

是の時に當り、南方に交人なる社會あり。宋が之れと難を構ふるにより、大舉して入犯す。之れより南方又大に亂る。

金は元と女眞と云ふ。本名は朱里眞。肅慎の一種なり。部落七十二あり。相

ひ統一せず。契丹の盛んなる時に當て此れに服屬す。其の後之れに反き東北五國と相合して遂に反し、五十四郡を合す。國を大金と號す。宋の大敵たり。此れより宋を伺ふ。金の太祖の太子幹離不なる者勇略あり。兵を率いて燕に入り。遼主改名契丹のを擒にし。勢に乗じて南進し大原を圍む。茲に於いて宋の天子位を太子欽京に譲り、出奔す。時に國論二に分かれ、和を主とする者あり。戰を主とする者もあり。帝邦彥の言を用いて和を講せり。既にして金人又來り。京師に入り。京師圍を受る事四十日。上皇及帝を以て北に歸る。

斯くして宋の社會は一旦金人の爲に蹂躪せられたり。然れども支那には支那固有の文明あり。是の文明は深く人心に浸潤せしものと見え。金人は支那の文明に化せり。金人は遼を滅ろぼして燕京に都せしが更に北方蒙古の爲に攻められ、汴京に移るに至れり。汴京は黄河の南にあり。故に金人全然宋の文化に浸潤せられしと遼に異ならず。

此の時に當り宋は高宗皇帝が位に南京に就き之れを南宋と云ふ。屢々

金人と相争ふ。互ひに勝敗あり。

第二節 蒙古の興起

是の時に當り北方に恐るべき蒙古の現はれたるあり。屢々金人を攻撃して之れを破り。遂に宋を滅せり。

蒙古は世々烏桓の北に居る。遼及び金に歷事せり。五人種より成る。（現在の蒙古に付いて述ぶ、其の風俗は元の頃も大差なかるべきなり）

- 一、カルカ
- 二、カルムイク(イルト)
- 三、ウリヤンハイ
- 四、タンクート
- 五、トンガン(チベット)

是れなり。其の中「カルカ」人種最も多く、殆んど三分の二を占む。最も勇悍なり。往古成吉思汗に従ひ、中央亞細亞を蹂躪したるは此の人種なりと

云ふ。但だ其の支那本部に接する部分は漢人と婚媾し、人種純粹ならず。蒙古人に農民と游牧民との別あり。農民耕作を業とすれども亦た牧畜をも兼ね。粘土を以て家を作り、昔くに茅藁を以てす。游牧民は男女共に馬に騎り、寢食の外馬上を離るゝとなし。夏時は牧草繁茂の地を逐ふて遷移し、冬季は山谷に移りて寒を避く。屢々遷移するため家屋は極めて質朴なり。圓形の帳幕内に生活す。帳幕を作るは婦人の職掌たり。游牧民は懶惰にして殘酷なり。

多くの部落に分れ、各々長あり。長は絶對の權を有し、其の下を壓制す。元史本紀參謀本部編纂要するに蒙古は人文開けず、支那に接近する地方は支那地誌蒙古部要するに蒙古は人文開けず、支那に接近する地方は農耕に従事すれども大部は水草を逐ふて轉移する游牧民なり。此くの如き社會が實に開化人種を征服して空前絶後の偉業をなしたるなり。宋の寧宗の時、鐵木眞なる者始めて帝と稱す。之を太祖成吉思汗となす。耶律楚材を相となし。東は金を侵し、南中央亞細亞を征し、西魯西亞に入り、其の地を取る。太祖崩じ、其の地を四分し、之を四子に分つ。

一、欽察王國 自東海至西 長子、朮赤領之。

二、察哈台王國 天山南路 二子、察哈台領之。

三、伊蘭王國 四子、施雷領之。

四、蒙古王國 自支那本部北至黑龍江 三子、窩濶台領之。

蒙古王國は即ち元の基業地なり。窩濶台位に即き、之を太宗となす。英武あり。自ら將として金を討し、之を滅す。屢々宋と兵を構ふ。太祖成吉思汗の孫忽必烈位に即くに及び、國號を元となす。忽必烈宋を滅し、支那を一統し、日本を征せんとして成らず。更らに鋒を轉じて緬甸を討し、西南夷十二部を下し、又瓜哇を討ち、安南を服し、東南亞細亞を平定せり。是の時に當り、元の國威世界に振耀し、其の版圖、東は高麗より亞細亞の大陸を中斷し、西歐洲の南部に跨り、地中海の濱に達す。廣大なる版圖は空前絶後たり。而して其の首府は燕京に在り。

第三節 元の統一策

蒙古は天下を併呑せりと雖も人種の感情は容易に滅却すべからず茲に於て文天祥謝枋得の徒は元朝に仕ふるを屑とせず執はれて燕京に至り天祥は殺され枋得は食はずして道に死するに至る元の朝廷も此の點を觀此の欠點を補はんとに勉めたり。

(一) 元の朝廷は南人を求むるに極めて急にして文天祥謝枋得の如き皆其の召を蒙むれる者なり此れ蓋し社會中樞を自己の政府内に入れんとするに外ならざるなり。

(二) 宋の太后全氏の國亡びて京に至るや世祖の皇后弘吉刺氏極めて之を優遇せり。

(三) 孔子は實に支那歴代の尊崇する所にして支那を結合する所以の最も強き紐帶なり元の武宗皇帝も孔子を加封して大成至聖文宣王と曰ふ仁宗皇慶二年六月詔して周敦頤張載邵雍司馬光朱熹張栻呂祖謙

許衡を孔子の廟庭に従祀せり。

是れより先き宋の未だ亡びざる太宗十年宋の理宗皇帝嘉熙二年領中書行省楊惟中太極書院を燕京に建て趙復を延きて師となす此の時周子の太極圖說未だ河朔に至らず惟中師を蜀湖京漢に用ひて名士數十人を得始めて其の道の粹を知る乃ち伊洛の書を収集し載せて燕京に至る師還るに及び太極書院及び周子の祠を建つ二程張楊游朱の六子を以て配食とす河北是れより道學を知ると云ふ。

(四) 又極めて佛教を興隆せり武宗の時宣政院旨を奉じて西僧を毆つ者は其の手を斷たん罵る者は其の舌を截らんと云ふに至る皇太子の其の先例あらざるを以て諫むるに由りて止む然れども此の頃の佛教は極めて幼稚なる者にして因果の理を以て人民を煽動するのみ是の故に尉遲德政なる者上言して西僧佛事を作るを以て罪囚と疎放し以て福を祈るとなし奴婢主を殺し妻妾夫を殺し而かも夤緣にて免るゝを得ると云ふ典常を亂る之れより甚きはなしと云ふに至る然れども

ん^ニ り^ハ ゑ^カ え^カ へ^カ ひ^カ 九^カ
 一^ニ 二^ハ 三^コ 四^ロ 五^セ 六^ソ 七^タ 八^チ 九^ツ
 十^ト 十一^テ 十二^ト 十三^ト 十四^ト 十五^ト 十六^ト 十七^ト 十八^ト 十九^ト
 二十^ト 二十一^ト 二十二^ト 二十三^ト 二十四^ト 二十五^ト 二十六^ト 二十七^ト 二十八^ト 二十九^ト
 三十^ト 三十一^ト 三十二^ト 三十三^ト 三十四^ト 三十五^ト 三十六^ト 三十七^ト 三十八^ト 三十九^ト
 四十^ト 四十一^ト 四十二^ト 四十三^ト 四十四^ト 四十五^ト 四十六^ト 四十七^ト 四十八^ト 四十九^ト
 五十^ト

此れ等の字母を綴り合はして以て文字をなすなり。

一^ニ 二^ハ 三^コ 四^ロ 五^セ 六^ソ 七^タ 八^チ 九^ツ 十^ト
 十一^テ 十二^ト 十三^ト 十四^ト 十五^ト 十六^ト 十七^ト 十八^ト 十九^ト 二十^ト
 二十一^ト 二十二^ト 二十三^ト 二十四^ト 二十五^ト 二十六^ト 二十七^ト 二十八^ト 二十九^ト 三十^ト
 三十一^ト 三十二^ト 三十三^ト 三十四^ト 三十五^ト 三十六^ト 三十七^ト 三十八^ト 三十九^ト 四十^ト
 四十一^ト 四十二^ト 四十三^ト 四十四^ト 四十五^ト 四十六^ト 四十七^ト 四十八^ト 四十九^ト 五十^ト

第九章 思想不振

序言

元は西の方州を蹂躪して其の文明を破壊し東は支那帝國を併合し
 て之れを統御し其の學を起すに勉めたり然れども學者は但だ程朱
 の説を受けて之れを敷衍するのみ其の社會の中に蔓延し社會に大
 勢力を及ぼしたるとは疑ふ可からざるなり。

一、許魯齋

許魯齋名は衡字は仲平學者稱して魯齋先生と曰ふ河内の人姚樞を蘇
 門に訪ふて伊洛新安の書を得姚樞は即ち趙復乃ち曰はく今始めて進
 學の序を得たりと元の世祖の時京師に至り國子祭酒を授かる元の至
 元二年上書して國の規模を立つるを言ふ至元十八年卒す年七十三卒
 する時其の子に謂て曰はく我れ虚名に累はされ辭する能はず我が慕

には單に許某となすべしと著はす所魯齋心法あり、又魯齋全書あり。
 學說 魯齋心法は即ち治心の工夫なり。要は心をして公明正大ならしむべきを云ふ。曰はく人心虛靈無稿木死灰之理と云ひ天地間須大著心不可拘于氣質于一已と云ふ其の凡事理之際有兩件有由自己底有不自由自己底由自己底有義在不自由自己底有命と云ひ凡事一省察不要逐物去了。雖在千萬人中常知有已此持敬大略也と云ふ是れ最も心を持するに私なきを云ふなり。

二、劉靜脩

劉靜脩名は因字は夢吉雄州容城の人趙復に就きて周程張邵朱呂の書を得て大に喜ぶ其の學の長ずる所を評して曰はく

邵至大也周至精也程至正也朱子盡其大盡其精而貫之以正也。

元の至元十九年詔徴して承德郎右贊善大夫となし近侍の子弟を教ふ未だ幾くならずして母の疾を以て辭し歸る二十八年召せども就かず

帝曰はく古の不召の臣なりと三十年卒す年四十五著はす所靜脩文集あり然れども哲學上見るべき者なし。

三、吳草廬

草廬名は澄字は幼清撫州崇仁の人至大元年召されて國子監丞となる、既にして辭し去る元統元年卒す西暦一曰はく至順二年即年八十五學者稱して草廬先生となす。

學說 以爲らく朱子問學を主とし陸子徳性を尊ぶを以て主となす然れども問學徳性に本づかずむば則ち其の弊必ず語言訓釋の末に偏す故に學必徳性を以て本となす庶くは之を得むと學者之れに由りて陸學者となせども其の思想を見れば折衷たると疑ふ可からず。

又曰はく道の大原天に出づ神聖之を繼ぐ堯舜以上は道の元なり堯舜以下は道の亨なり洙泗魯鄒は利なり濂洛關閩は貞なり分て之を言へば上古の羲皇は元たり堯舜は亨たり禹湯は利たり文武周公は貞たり

中古に於ては仲尼は元たり。顔曾は亨たり、子思は利たり、孟子は貞たり、近古の周子は元たり、程張は亨たり、朱子は利たり、孰れが今日の貞たるかと、此れ又邵子の思想様式を受くる者、然れども其の學大抵朱子に出づ、其の徳性の知と聞見の知とを以て一となす者大に聽くべきあり、曰はく、聞見雖得于外、而所聞所見之理、則見于心、故外之物格、則内之知致、此儒者内外合一之學、固非如記誦之徒、博覽于外、而無得于内宋元學案九十二、五と、殆んど朱陸を折中せる者と謂ふべし。程伊川は聞見の智を以て氣に屬し、徳性の智を以て理に屬せり。朱子亦之に由る、陸子は則ち主觀的に理義の條を知るべしとなす、陸子の説は正さに、程朱の理性を説ける者なり。吳子は則ち主觀の理は即ち客觀界の聞見に由て知るべく、故に客觀的に理を聞見するは即ち主觀的に知る所以なりとなす。然らば則ち其の根據如何んと問ふに、知力は即ち徳性の作用なればなり、曰はく、知者心之靈、而智之用也、未有出于徳性之外者宋元學案九十二、五と、程朱以外の思想なるを看るべし。

更らに理氣を説くに至りてや大に精密なるものあり、其の注意すべきは理氣を以て殆んど二元となさず、理を以て氣の中に在りとなすことなり。今其の一節を引用せん。

自未有天地之前、至既有天地之後、只是陰陽二氣而已、本只是一氣、分而言之、則曰陰陽、又就陰陽中細分之、則爲五行、五行即二氣、二氣即一氣、氣之所以能知此者何也、以理爲之主宰也、理者非別有一物、在氣中、只是爲氣之主宰者、即是無理外之氣、亦無氣外之理、人得天地之氣、而成形、有此氣、即有此理、所有之理、謂之性、此理在天地、則元亨利貞也、其在人、而爲性、則仁義禮智是也、性即天理、豈有不善宋元學案九十二、二、彼れ又人性善惡あるを説くに氣の清濁を以てせり。

氣質雖有不同、而本性之善則一

但氣質清ならず、美ならざる者は其の本性汙壞あるを免れず、故に學者當用反之之功、反之如湯武、反之也中略、故曰善反之、則天地之性存焉と云へる所以なり。

四、陳靜明

陳靜明名は宛字は立大、西上饒の人なり。人稱して靜明先生となす。嘗て陸象山の書を得て之を讀み、大に喜び、以て知を致たし行を力むるに足るとなす。弘く求めて陸子派の書を讀む。是の時科擧方さに朱子學を用ふ。故に人或は之を非毀す。甚だしきは之に中てんとする者あるに至る。陳子死を以て誓ひ、其の學を改めず。必ず訓詁支離の學を一洗せんことを期す。是れより人初めて陸氏の學を知ると云ふ。其の高弟子を祝養、李存、舒衍、吳謙となす。江東の四先生と稱せらる。陳子の卒詳かならず。一に云ふ。至訓元年卒し、年七十五。

五、趙寶峰

趙寶峯名は偕、字は子永、慈谿の人。學者稱して寶峯先生となす。敦厚を尙び、矯飾を好まず。慈湖の書を得て之を讀み、森羅萬象渾て一體たりと云

ふを見道以て此に在りとなす。乃ち三代の治復すべく、百家の説一にすべしと信ず。遂に大寶山下に隠る。宋の遺民を以て義元に仕へず。遺文寶雲堂集。兵火に逢ひ、散逸する者あり。其の學靜坐を尙ぶ。慈湖の餘流ありと云ふ。

六、金仁山

仁山字は履祥、金華の人なり。純粹なる朱子學なり。其の門人許謙に謂て曰はく、我が儒の道は理一而分殊、理は一ならざるを患へず。難き所は分の殊なるのみ。又曰はく、聖人の道は中にしてのみと、著はす所、論孟の考證なり。許謙の序に曰はく、

聖賢之心盡在四書、而四書之義備於朱子。顧其玄言辭約、意廣讀者或得其粗、而不能悉究其義。或以一偏之致自異、而初不知未離其範圍、世之誣訾、實亂務爲新奇者、其弊正在此耳。此金先生考證之所由作也。と。端なく考證學の端緒なり。

七、鄭師山

鄭師山、名は玉、字は子美、徽州歙縣の人、至正十四年、朝廷以て翰林待制奏議大夫に除す、辭して起たず、家に居り書を著はすを以て業となす、著はす所周易纂註あり、至正十四年、明兵徽州に入り之を囚にす、親戚朋友之に贈餉するあれば從容歡を盡し、且つ告ぐるに必死を以てす、其の二姓に事へざるを以てなり、其の妻從て死せんとす、師山悦び、明日衣冠を具へ、北面再拜自縊して卒す。

學說 師山亦朱陸を調停せんとす、其言に云はく、

陸子之質高明、故好簡易、朱子之質篤實、故好邃密、各因其質之所近、故所入之途不同、及其至也、仁義道德、豈有不同者、同尊周孔、同排佛老、大本達道、豈有不同者、後之學者、不求其所以同、惟求其所以異、江東之指江西、則曰此怪說之行也、江西之指江東、則曰此支離之說也、此豈善學者哉、朱子之說教人爲學之常也、陸子之說、才高獨得之妙也、二家之說

又各不能無弊、陸氏之學、其流弊也、如釋子之談空說妙、工于鹵莽滅裂、而不能盡夫致知之巧、朱子之學、其流弊也、如俗儒之尋行數墨、至于頽惰委靡、而無以收其力行之效、然二先生垂教之罪哉、蓋學者之流弊耳、と論じ得て極めて正當なり。

八、小説

小説は又元代の産物として述べざる可からず、小説の始めは、周代の稗官より出づ。

漢志には九流の外に小説の一家あり、曰ふ小説家者流は蓋し稗官に出でたり、街談巷語、道聽塗說の造くるところたりと、然らば小説の源は遠く周代に發せしものと見るべきなり、漢より以降魏晉南北朝、宋を経て神仙記、異聞、瑣語の造くられしもの多し、唐宋以後は此れ等に關する作者彌々繁くして小説戲曲の作は益々饒くなれり、四庫全書總目に分つて三派となせり、一、雜事を敘述す、二、異聞を記録す、三、瑣語を綴輯す、是の

類或は勸戒を寓し見聞を廣うし考證を資くるもの亦た多し。又一派の假託寓言して一紀事を作爲するものあり。或は實を假りて以て其の義を敷演するあり。或は空に憑つて以て其の説を構造するあり。是の類は六代より尤も行はるゝに至りし者なり。是に於いて神仙記、異聞、瑣語は更に寓言小説、假托小説、演義小説、想像小説等を以て、雜え行はれ、小説は雜然として天下に遍ねきに至れり。元には施耐庵なる者の作れる水滸傳七十一卷あり。王實甫の西廂記、高則誠の琵琶記の如き亦戯曲として有名なる者なり。

九、詩 文

詩文は北方勁雄の風を受ける者多し。略今

楊維禎鴻門會

天迷關。地迷戶。東龍白日西龍雨。撞鐘飲酒愁海翻。碧火吹巢雙狹獺。照天萬古無二鳥。殘星破月開天餘。座下有客天子氣。左腋七十二子連明珠。軍聲十萬振屋瓦。拔劍當人百如赭。將軍下馬力拔山。氣卷黃河酒中

斗。
鴻。劍光上天寒。彗殘。明朝畫地分河山。將軍呼龍將客走。石破天撞玉

十、劉 基

劉基は元の末葉の人にして天文兵法性理の書、目を過ぎて洞識せざるなし。明主朱元璋起るに及び、之れに従ひ、帷幄に參じ、贊畫する所尤も多し。郁離子を著はす。是れ雜説を蒐集せる者。子自身の説を見るべきなし。太祖帝洪武八年卒す。

十一、宋 濂

宋濂も亦た劉基と同時に明朝に仕へし者にして儒學を以て名あり。太祖、宋濂を召して共に神仙を論ず。對へて曰はく漢武神仙を好みて方士至り、梁武佛を好みて異僧集まる。苟も此の心を移して賢人を求むれば天下治まらんと。

其の六經論に云はく、

六經皆心學也。心中之理無不具。故六經之言無不該。六經所以筆吾心之理者也。是故說天莫辨乎易。由吾心即太極也。說事莫辨乎書。由吾心政之府也。說志莫辨乎詩。由吾心統性情也。說理莫辨乎春秋。由吾心分善惡也。說體莫辨乎禮。由吾心有天叙也。導民莫過乎樂。由吾心備人和也。人無二心。六經無二理。因心有此理。故經有是言。

と。此れ陸象山が六經皆吾が註脚と言へると同く心を以て一切の理を具備すとなすなり。故に又曰はく

聖人一心皆理也。

と。而して衆人は理を具ふと雖も欲の害するあるため之れを全ふすると能はず。其の心の本とより具ふる所に因みて六經を以て之れを教育するなりとなせり。曰はく、

其人之溫柔敦厚。則有得於詩之教焉。疏通知遠。則有得於書之教焉。廣博易良。則有得於樂之教焉。潔靜精微。則有得於易之教焉。恭儉莊敬。則

有得於禮之教焉。屬辭比事。則有得於春秋之教焉。然雖有是六者之不

同。無非教之以復其本心之正也。と。六經は吾が天眞の心性を全ふする所以なり。彼れは又儒者に七種の別ありとせり。

- 游俠之儒 田仲、王猛
- 文史之儒 司馬遷、班固
- 曠達之儒 莊周、列禦寇
- 智數之儒 張良、陳平
- 章句之儒 毛萇、鄭玄
- 事功之儒 管仲、晏嬰
- 道德之儒 孔子

是れなり。又曰はく

道德之儒孔子是也。千萬世之所宗也。我所願則學孔子也。其道則仁義禮智信也。其倫則父子君臣夫婦長幼朋友也。其事易知。且易行也。能行

之則身可脩也。家可齊也。國可治也。天下可平也。我所願則學孔子也。七

と。道德の儒は彼れの言に據れば陰陽の和を備へ、鬼神の秘を涵し、萬物の理に達し、言は以て世法たるに足り、行は以て世表たるに足り、人得て之れを名くるなき者なり。

太子に傳たるに十餘年、一言一動禮ならざるなし。洪武十三年其の孫愼の時に、坐して茂州に安置せられ道に卒す。

十二、方孝孺

孝孺も亦た元末の人にして明の世に及む。蜀王椿其の賢を聞き聘して世子の師となし、其の讀書の廬を名けて正學と曰ふ。洪武三十一年翰林博士となす。帝書を讀みて疑ひある毎に孝孺を召して誦解せしむ。二世惠帝燕より入りて統を嗣ぐ。孝孺屈せず。之れを罵詈し遂に殺さる。之れより先き惠帝北平を發せし時姚廣孝方孝孺を囑して曰はく、彼れを

殺す勿れ、殺さば則ち學問の種子絶たんと。已にして殺さる。門弟子甚だ多し。

十三、薛瑄

薛瑄も亦た一代の儒宗なり。年十二にして詩賦を作る。稍長じて周程張朱の書を講じ、嘆じて曰はく、此れ道學の正脈なりと。遂に其の作る所の詩賦を焚き、進士に登る。其の後小人石亨等が事を用ふるを見、致仕して去る。

十四、吳康齋

此の時に當りて學問は益々個人的坐禪的となれり。其の適例は吳康齋なり。康齋は明人名は與弼、字は傳康齋は其の號なり。十九歳京師に出て伊洛淵源録を讀み、慨然道に志す。陳白沙來り學ぶ。吳子以て賢となし、善く之れを郷導す。嘗て曰はく、

食後坐東窓四體舒泰神氣清明讀書愈有進益數日趣同此必又透一關矣

と又曰はく

澹如秋水貧中味和似春風靜後功

と云ひ又曰はく

寢起讀書柳陰及東窓皆有妙趣

と云ふ以て學問の枯禪たるを見るべし

十五、胡敬齋

胡敬齋の學も亦同く枯禪的なり胡子名は居仁字は叔心敬齋は學者の稱する所弱冠往いて吳康齋に從て學ぶ其の説大に奇拔なる者あり羅豫章李延平を駁して曰はく

羅仲素李延平教學者靜坐中看喜怒哀樂未發以前氣象此便差却既
是未發如何看得只存養便是明儒學案二

と呂與叔蘇季明を駁して曰はく

呂與叔蘇季明求中於喜怒哀樂未發之前程子非之朱子以爲即已發之際默識其未發之前者則可愚謂若求未發之中看未發氣象則動靜乖遠反致理勢危急無從容涵泳意味同上

と又程子を駁して曰はく

遺書言釋氏有敬以直内無義以方外又言釋氏内外之道不備以上程子中の語蓋體用無二理内外非二致豈有能直内而不能方外體立而用不行者乎敬則中有主釋氏中無主謂之敬可乎同上

然れども遂に程子の此の言を以て記者の誤りとなし曰はく程子固曰惟患不能直内内直外必方と

十六、陳白沙

陳白沙の學は大に實際的なる者あり陳白沙名は獻章字は公甫學を康齋に受く成化二年大學に遊ぶ此より名聲頗る重し官翰林院檢討に至

る。嘗て曰はく、人所以學者、欲聞道也。求之書籍而弗得、則求之吾心可也。此れ象山に類せずや。又曰はく

人心上容留一物不得。才著一物、則有礙。且如功業、要做固是美事。若心々念々、只在功業上。此心便不廣大。便是有累之心。是以聖賢之心廓然。若無感而後應。不感則不應。又不特聖賢如此。人心本來體段皆一般。只要養之以靜、便自開大。

と、以て其の心を重んずるを知るべきなり。宜なるかな。陽明の其の門に出るや。

十七、王陽明

第一節 傳

王陽明、名は守仁、字は伯安、王右軍義之の後なり。慨然として四方經略の志あり。年三十五、兵事たり、獄に下さる。尋いで龍場驛の丞に貶せらる。明年即ち正徳二年夏、謫所に赴く。明年龍場に至り、一夜大に格物致知の旨

を悟り、知行合一の説を爲す。正徳六年始めて象山晦庵の學を論ず。陽明獨り思想に高きのみならず、兼て文詞に巧なり。陽明著はす所、書文詩の類、王陽明全書に在り。簡單に哲學思想を伺ふべきは傳習錄あり、此れ陽明生時門人等の梓する所に係る。

第二節 學 統

古來陽明の學統を以て専ら之を象山に屬系するは穩かならざる者あり。象山の知行合一説は其の端を程伊川に發せし者の如し、其の答王虎谷書に云はく、

程子云、知之而至、則循理爲樂。不循理爲不樂。自有不能己者。復理爲樂者也。非眞能知者、未易及此。知性則知仁矣。仁人心也。心體本自弘毅。不弘者蔽之也。不毅者累之也。故燭理明、則私欲自不能蔽。累、私欲不能蔽。累、則自無不弘毅矣。全書一

故に知行合一論は伊川と同一なりと謂ふべし。唯心を以て學問の第一

義となすは象山に異ならざるなり。固より象山の心即理の觀念も知行合一論の基礎たり得べきは明かなり。故に陽明は陸象山を以て正學の系統となせり。此れ陽明五十歳の時なり。

第三節 哲學的思想

第一款 知行合一

以上の如くなるを以て陽明の知行合一論は伊川より來れる者となさざる可からず。彼れが知行合一論に就きて言ふ所を見れば如何に伊川の說に因る所あるかを見む。以ふに陽明知行合一論の發明は三十七歳の時に在り。其の翌年即ち三十八歳の時門人徐愛知行合一の旨を問ふに答へて曰はく。

大學言。如好色。見好色。屬知。好好色。屬行。只見色時。己是好。非見而後始立心去好也。今人却謂。必先知而後行。且講習討論。以求知。俟知得真時。方去行。故遂終身不行。亦遂終身不知。

好色を見ると好色を好むとは同時なりとすれば此れ人性好色を好むの性あることを豫想する者なり。好色を見れば必ず之を好む。之を好むは見る時にあり見ると好むとは表裏を相爲す者なり。又曰はく。

知之真切篤實處。便是行。行之明覺精察處。便是知。若知時。其心不能真切篤實。則其知便不能明覺精察。不是知之時。只要明覺精察。更不要真切篤實也。行之時。其心不能明覺精察。則其行便不能真切篤實。不是行之時。只要真切篤實。更不要明覺精察也。知天地之化育。心體原是如此。乾知大始。心體亦原如此。三全書

要するに知と行とは表裏を相爲すものなり。勿論知と行と一は形式的一は具體的の別あることは陽明亦之を認めたり。然り而して知行合一論の基礎何くに在りや。曰はく心即理に存するのみ。故に曰はく外心以求理。此知行之所以二也。求理於吾心。此聖門知行合一之教也。此れ陽明知行合一論の大略なり。今其の伊川及び象山に對する關係を表示すれば左の如し。

人心

伊川

道心——知行合一論

陽明學

行はざるは知らざるなり。行ひ居るは知り居るなり。知り居ると云ふも行はざるは此れ眞に知り居るにあらざるなり。

象山——心
伊川の知行合一論が大に其の光彩を放たざりし所以は其の學問は人心と道心とを對立せしめ支離的傾向あるを以てなり象山は未だ知行合一論に説き及ばざるも心を以て學問の第一義となすは直截簡易以て其の學風をして屹然聖門の正統に繼ぐに足らしめし所以陽明は伊川の知行合一論と象山の學風とを受け知行合一心即理を以て其の學問の第一義となせり。

第二款 致良知

陽明は知行合一を以て其の學問の第一義となす然らば則ち善を知り、惡を知る所以の工夫如何となす陽明已に曰はく理を窮めて明かな

らざれば則ち之を心に求むべしと心に具備する理は如何んして之を知り得べきか此に至り彼れは良知の存在を認め良知が即ち其の局に當るべき者となして曰はく知善知惡是良知と彼れ又大學に所謂致知を解して良知を致すとなせり今暫く良知の何にたるかを説明せむ。

(一) 良知と心との別 陽明が良知と心とを説くを見るに良知は靈昭不昧に付きて云ひ心は即ち理に付きて云ふ天命之性粹然至然其靈昭不昧者皆其至善之發見是乃明德之本體而所謂良知者也全書六親民堂記 故に明德の本體即ち良知なり其の心を解するに曰はく心性也性天也聖人之心純乎天理故無俟於學謹齋記 故に一言にて言へば心の靈昭不昧なる點より見れば即ち良知なり答顧東橋書全書二に云はく心之虛靈明覺即所謂本然之良知也故に良知は發動せる者にあらず故に曰く未發之中即良知也無前後内外而渾然一體者也全書二七と曰はく雖妄念之發而良知未嘗不在但人不知存則有時而或放耳雖昏塞之極而良知未嘗不明略若謂良知亦有起處則是有時而不在也非其本體之謂矣全書二

(二) 良知は萬物に普遍なり。曰はく人的良知。就是草木瓦石の良知。若草木瓦石。無人的良知。不可以爲草木瓦石矣。豈惟草木瓦石爲然。天地無人的良知。亦不可爲天地矣。是說や良知と心と體を同ふし、即ち理即ち性、性は内外を貫徹し二なしとの説に本づく者にして唯心論とは寸毫の關係なき者、混同すべからず。

良知が各人に普遍なりと云ふは、是れ彼れが心即理の假定より伴ふ必然の結論にして今之を論ずるの要なし。

第三款 意

知行合一の基礎と觀念とは、既に之を明かにし、併せて理の善惡を知るは即ち此の良知なる所以を明示せり、今一言以て之を約せんに、其虚靈明確良知、應感而動者謂之意、有智而後有意、無知則無意矣、知非意之體乎。全書二答 顧東橋書 知りて而して後意あり、意は即ち意志なり、知あれば必ず此意志あること恰も物の美味を知れば則ち之を欲する如し、既に意志あれ

ば必然的に行爲に表はる、意之所用、必有其物、物即事、如意用於事、親、即事、親爲一物、意用於治民、即治民、爲一物、意用於讀書、即讀書、爲一物、意用於聽訟、即聽訟、爲一物、同意は必然的に行爲に表はるゝのみならず、物即ち行爲と意とは必然的に形式を同ふするものなり、換言すれば倫理的行爲は人性必然の者必然に發現する者なり、倫理的行爲にして其淵源を先天的に人性に具備せざる者あらず、則ち曰はく凡意之所用、無有益、物者有是意、即有是物、無是意、即無是物矣、物非意之用乎、同行爲と意と知と、此三者を以て同一體にして唯だ其の態相の異なることなす者、是れ陽明致學の精華なり。

第四款 仁の説

陽明の哲學は心即理なり、即ち良知なり、即ち性なり、陽明は直ちに之れを以て仁となすなり、故に前には良知の萬物に普遍なるを述べしが更らに仁の萬物に普遍なるを述べたり、以爲らく形骸は人々相ひ異なる

と雖も心の仁は即ち天地万物と通じて一體なる者なり。大人の心此く大なるにあらず。小人の心と雖も然かるなり。唯だ自ら小なりとなすのみ。其の證に曰はく。

是故見孺子之入井。而必有怵惕惻隱之心焉。是其仁之與孺子而爲一體也。孺子猶同類者也。見鳥獸之哀鳴。殺斃。而必有不忍之心焉。是其仁之與鳥獸而爲一體也。鳥獸猶有知覺者也。見艸木之摧折。而必有憫恤之心焉。是其仁之與艸木而爲一體也。艸木猶有生意者也。見瓦石之毀壞。而必有顧惜之心焉。是其仁之與瓦石而爲一體也。是其一體之仁也。雖小人之心。亦必有之。是本根於天命之性。而自然靈昭不昧者也。

と孺子の井に入らむとするを見て憫憐の心を起すは我が仁が孺子に一體なるためなりと云ふ。此れ今日の人に取て解す可からざるなり。然れども彼れは天地万物を一體となし、私心を去るべきを教へ、民と親むと云ふは即ち我が仁を作用せしむる所以なりとせり。曰はく、

故明明德必在於親民。而親民乃所以明其明德也。是故親吾之父以及

人之父。及天下人之父。而後吾之仁實與吾之父人之父。與天下人之父。而爲一體矣。實與之爲一體。而後孝之明德始明矣。親吾之兄。以及人之兄。以及天下人之兄。而後吾之仁實與吾之兄人之兄。與天下人之兄。而爲一體矣。實與之爲一體。而後弟之明德始明矣。君臣也。夫婦也。朋友也。以至於山川鬼神鳥獸艸木也。莫不實有以親之。以達吾一體之仁。然後吾之明德始無不明。而真能以天地萬物爲一體矣。

第五款 性に関する餘論

陽明は心即理を立し、理即性となせり。然らば性は果して如何なる者か、換言すれば他の心的因子に對する關係如何。陽明即ち曰はく、

性一而已。仁義禮智。仁之性也。聰明睿知。性之質也。喜怒哀樂。性之情也。

私欲客氣性之蔽也。質有清濁。故情有過不及。而蔽有深淺也。私欲客氣。一病兩痛。非二物也。

性に付いて、性質情蔽の四方面を區別す。語窮するが如くにして之れを解し難し。然れども以て良知即ち性なる者の數多の屬性を有するを知るに足る。

第四節 修爲論

第一款 誠意

是の故に陽明の哲學にては意を誠にするを以て最も必要のとなす。大學は誠意を以て治國平天下より修身齊家のとに至る迄の根本的作用となせり。陽明も亦た然かり、意の出る處即ち此れ倫理なる様になりたる時は意が誠になりたる者なり。意が誠になりたりと云ふ以上は意は誠にならざるとあるを假定する者なり。眞に然かり。陽明は心の本體は善なれども意の動くに不善ありとなせり。曰はく、

心之本體本無不正也。何從而用其正之之功乎。蓋心之本體本無不正。自其意念發動而後有不正。故欲正其心者。必就其意念之所發而正之。故に意の發する所に付いて之れを正さざる可からず。意の發する所にして善ならば之れを好むと眞に好色を好むが如くなるべく、意の發する所にして悪ならば之れを惡むと眞に惡臭を惡むが如くなれば則ち意誠ならざるなく、而して心正ふすべきなり。

第一款 致知

意の善不善を甄別するは良知に由る。故に良知を明かにするは第一必要のとなり。致知とは即ち良知を明かにするなり。良知を明かにするは善とする所は之れを好み惡むする所は之れを惡み、其の通りに行はざる可からず。然らずして善と知りても心に之れを好まず、惡と知りても心に之れを惡まずむば則ち良心を蔽ふて昧からしむるなり。曰はく、

今欲別善惡以誠其意。惟在致其良知之所知焉。爾何則意念之發。吾心

之良知既知其爲善矣。使其不能誠有以好之。而復背而去之。則是以善爲惡。自昧其知善之良知矣。意念之所發。吾之良知既知其爲不善矣。使其不能誠有以惡之。而復蹈而爲之。則是以惡爲善。而自昧其知惡之良知矣。若是則雖曰知之。猶不知也。意其可得而誠乎。今於良知識知之善惡者。無不誠好而誠惡之。則不自欺其良知。而意可誠也已。

と。則ち良知を明かにすとは善と惡とを識別する力を養ふのみにあらず。一步進むで之れを好み。又は之れを惡む様にせざる可からず。是れ即ち心を修養するなり。

第三款 格 物

然らば良知を致さんとする者は物を格するに在り。物とは何んぞや。意中[○]に在る所の者[○]なり。父母に仕へ。君に仕へ。朋友と交はり。子を愛し。兄弟を親むが如き倫理も然かり。又人を欺き。君を害し。親に對して孝順ならざむとする如き惡も亦た然かり。其れ等の善は直ちに之れを實行す

るに勉めざる可からず。然らざれば善未だ格らざる所あり。又意中の惡。良知之れを惡まば則ち直ちに其の[○]を實行する上に於いて去らざる可からず。然らざれば物未だ格らざる所あるなり。而して之れを惡むの意未だ誠ならざるなり。若し意中在る所の物に付いて良知の善とする所は之れをなし。良知の惡とする所は之れを去り。盡くし了らば則ち物格らざるなく。吾が良知の知る所の者虧損なし。曰はく、

良知識知之善。雖誠欲好之矣。苟不即其意之所在之物。而實有以爲之。則是物有未格。而好之之意。猶爲未誠也。良知識知之惡。雖誠欲惡之矣。苟不即其意之所在之物。而實有以去之。則是物有未格。而惡之意。猶爲未誠也。今焉於其良知識知之善者。即其意之所在之物。而實爲之。無有乎不盡。然後物無不格。而吾良知之知者。無有虧缺障蔽。而得以極其至矣。と。要之。良知は吾が心の本體にして。虚靈不昧の者。然るに意の動く所時にして。不善なき能はず。意を誠にするは此の不善を正ふるに在り。即

ち良心に鑑み、善は之れを好み、不善は之れを惡む様にせざる可からず。此くせむには事々物々に付いて善を實行し、不善を避けざる可からざるなり。又曰はく、

非防於未萌之先、而克於方萌之際、不能也。防於未萌之先、而克於方萌之際、此正中庸戒慎恐懼、大學致知格物之功、舍此之外、無別功矣。

と。以て意を誠にせんとするを見るべきなり。此くの如くすれば、則ち良知其の儘玲瑯透徹として意にして誠ならざるなきなり。一言にて言へば、良知を強くするに在るなり。

第四款 坐 禪

象山の學は禪宗に類せり。陽明の學も頗る禪宗に類せり。何んとなれば心を以て本來靈明なるものとなし、此の靈明の體をして其の儘ま光輝を發せしめんとするに在ればなり。禪宗の禪に入るは心を定めんとすなり。陽明も亦た坐禪の放心を求むる一端なるを説けり。曰はく、

靜坐事、非欲坐禪入定、蓋因吾輩平日爲事物紛拏、未知爲己、欲以此補小學收放心一段工夫耳。

と。禪をなして放心を求むるは宛然禪宗の教儀に異ならざるなり。

結 論

陽明は本然氣質に付いて多く言をなさず。但だ良知の説を精緻にせり。宋代は本然氣質の説猶ほ盛んなるの時として心即理を立すと雖も猶ほ時に氣質を言へり。然るに陽明は殆んど其の學の根本をして宋儒と異なるかの如くに思はしむ。是れ大に進歩せる所なり。宋の末葉より元明に至る迄學者概ね程朱の説を奉じ、枯禪的窮理的の人物のみ多かりしが陽明に至りては赫然として學問の一新を促がせり。陽明の學海に於ける効偉なりと謂ふべし。陽明龍場に謫せられ、弟子頗る多し。

十八、羅整菴

陽明の學は此く宋儒と太だ異なる者ありと雖も此れと同時に宋儒の學を傳承し、但だ之れを改革して大に見るべき者あり、之れを羅整庵となす。整庵名は欽順、字は允升、嘉靖二十六年四月二十四日卒す、著はす所困知記あり。

整庵は氣の一元論を主張せる者なり、以爲らく、氣は主にして理は氣に附するものなりと、天地に通じ古今に亘り、一氣に非るなく、氣は本となり、而して一動一靜一往一來一闢一闢一升一降、循環已むなく、温涼寒暑となり、生長收藏となり、日用彝倫となり、成敗得失となり、千緒萬端、紛々然として、而かも終に亂れず、其の然る所以を知るなくして然る、是れ即ち所謂理なりと、又曰はく、初非別有一物、依氣而立、附於氣以行也。此に至り理の觀念が朱子よりも抽象的になれるを見る。故に彼れ明かに朱子學の出處を示し、且つ之を駁せり。曰はく、

太極圖說、無極之真、二五之精、妙合而凝、三語、愚不能無疑、凡物必兩、而後可以言合、太極與陰陽、果二物乎、其爲物也、果二、則方其未合之先、各安在耶、朱子終身認理氣爲二物、其源蓋出於此。

と、朱子の二元論を駁し、氣の一元論を取るものなり。

整庵が理一分殊を説くや、朱子に異ならずと雖も、亦大に精細喜ぶべき者あり、曰はく、性命の妙は理一分殊の四字に出るなり、一物の生ずる氣を受くるの初め、其の理唯一のみ、成形の後、其の分は則ち異なれり、其分の殊なるは自然の理にあらざるなし、其の理の一は常に分殊の中に在り、此れ性命の妙たる所以なり、其の一なるより云ふ、故に人皆以て堯舜たるべく、其の殊なるより云ふ、故に上智下愚と移らざるなりと、又曰はく、天地人物、止だ是れ一理、然り而して天道を語れば、則ち陰陽と曰ひ、地道を語れば、則ち剛柔と曰ひ、人道を語れば、則ち仁義と曰ふ、此れ皆其の分殊なるばり、大抵性は命を以て、同く道は形を以て、異なれり、異同の際に明かなる者にして、以て能く天地人物の性を盡くすべしと。

是れより後ち有名なる思想家少し清朝に及びて所謂考證學の一派起り考證學は典籍の眞偽を考證する者にして明の頃より其の端を發せしが清に至りて煥然たる一大文明となりしなり。(今略)

第九章 明清の政治現象

第一節 元末の諸勢力

世界的の一大帝國を建設せる元も其の内に諸種の社會的勢力の併立を見るに至れり。凡そ支那に於いて代の代はる毎に其の初めは威光赫々として能く抗爭する者なく、君主自身も能く謹み、能く勵み、施政の方針宜きを得ると雖も二三世に及びて平和に忤れ既に政事に倦む、中興の祖ありて能く赫然一新すと雖も積勢の向ふ所朝廷に於ける君臣の心を取り直ほすと能はず。安樂に耽り、因循姑息能く爲すなし。而して外戚宦官從て權を擅にし、地方の侯王若くは藩鎮亦隨て睽離の心を生じ、天下の輿望漸く朝廷を去るを見るや、群盜蜂起し、而して之れを一統せんとする者起る。

周秦漢晉隋唐宋元皆な同じ法則の反復ならざるなし。元に於いても亦た其の初政は大に見るべしと雖も燕帖木兒伯顔の徒、權を擅にするに及びて大に亂る。宋濂云ふ。

議者往々謂天下之亂皆由賈魯治河之役。勞民動衆之所致。殊不知元之所以亡者。紀綱廢弛。風俗儉薄。其致亂之階。非一朝一夕之故也。使魯不興是役。天下之亂。詎無從而起乎。

と、順帝其の即位は元建國より五十餘年に當るの時より反者大に興る。

(一) は蒙古人種即ち同人種に屬する者にして唐其勢是れなり。伯顔權を擅にするを見て曰はく、天下は我が家の天下なり。伯顔何者ぞ、敢へて我が上に位すと。謀洩れて殺さる。

(二) は異人種にして靖州の猺吳天保なる者は是れなり。時に湖廣の猺も俱に亂る。而して天保の勢尤も熾んなり。黔陽武岡淑浦の諸郡縣を寇陷す。衆六萬餘あり。廣西の峒猺も亦た隙に乗じて入寇す。

臺灣の方國珍も亦た亂をなし、衆を海上に聚む。遂に温州を攻む。

(三) は宗教上の勢力にして、潁州の妖人劉福通亂をなし、紅巾を以て號となし、潁州を陷る。是れより先き樂城の韓山童の祖父白蓮會を作り、香を燒き衆を惑はす。山童に至りて言をなして曰はく天下大に亂れ、彌勤佛下生すと。河南及び江淮の愚民翕然として之れを信ず。福通も亦た妖言す。山童當さに中國の主たるべしと。共に兵を起して亂をなさんと欲す。事覺はれ、山童捕はる。福通黨盛んにして制す可からず。反して潁州を攻め破り、衆十萬に至る。

蕭縣の李二、芝蘇李と號し、亦た燒香を以て衆を聚む。其の黨趙均用、彭早住と徐州を攻め陷る。

蕪州の徐壽輝等も亦た妖術を以て衆を聚めて反し、亦た紅巾を以て號となし、蕪水縣及び黃州を陷れ、國を天完と號し、治平と改元す。泰州張士誠も亦僧なり。其の後衆を卒ひて反し、勢頗る強し。

宗教の社會に勢力あるは已に漢の黃巾賊に始まれり。其の後三國

六朝の頃に及びて佛教道教共に益々蔓延せしが又以て其の勢力の如何んを想像するに足らむ。而して宗教的勢力の大なる恐くは元末に如く者あらざるべし。

(四) は漢人種の豪傑にして郭子興及び其の將朱元璋の如き者なり。

此くして天下に諸種の勢力獨立し、各々兵力を以て州郡を掠奪し。一方には元兵之れに向て衡爭し、天下は大亂となれり。其の中に就いて最も大なる者を朱元璋となす。

第二節 明の統一

朱元璋は濠州の人、初め郭子興に従ひ、諸州を降服し、子興の卒するに及び自立して王となり、國號を立て、明となし、群雄を掃蕩し、天下を一統す。洪武元年十一月詔して胡俗を禁じ、悉く中國衣冠の舊に復せしむ。是れ以て人種の觀念の強大なりしを知るに足る。諸子を分封し、封を受く

る者二十四人、帝性剛明、終に有名なる明律を定む。支那に於ける法制の最も完全なる者なり。儒者劉基、方孝儒、宋濂、薛瑄の徒皆な任用せらる。即ち儒學の政治に及ぼしたる影響の之れありしとは疑ひなきなり。明諸子を分封し、本軽く末重きの弊は忽ち燕王太祖の第四子の反となりて見はる。燕王北平より大舉して來り犯し、京師に入る。二世建文皇帝出奔して終る所を知らず、燕王自立して天子となる。此れより後仁宗、宣宗、英宗、憲宗、孝宗を歴て天下太平なり。然かるに孝宗の時李廣政を専らにし、武宗の時劉瑾事を用ひ、多く賢人を疎外し、朝廷大に亂る。而して諸藩王劉瑾を誅するを以て名となし、兵を擧げ、天下大に亂れ、劉六、劉七、謝志、山池、大髯の諸賊相ひ次いで起り、憲王宸濠も亦た亂をなす。王守仁の一掃する所となる。

然るに其の後嚴嵩政を世宗の世に専らにし、賢人非議する者皆な斥けらる。而して明の政事愈々非なり。神宗の時に當り、一派の政黨起れり。東林黨なる者は是れなり。高攀龍、錢一本等學を東林書院に講ず。風を聞いて

景附する者多し。往々時政を非議す。朝廷の士亦之れに應ずる者あり。其の後孫丕陽、鄒元標、趙南星等相ひ繼いで學を講じ、自ら氣節を負ふて政府と相ひ抗す。光宗、熹宗の時葉向高、相となり、劉一燝等と心を協はせて政を輔け、東林黨を任用す。異なる者皆な斥けられ、茲に於いて斥けられたる者は魏忠賢に由りて勝を求め、東林黨を攻撃せり。東林黨遂に斥けられ、小人勝を制するに至れり。

第三節 外社會の狀勢と其の影響

内部に於いて政治の腐敗すると共に外部に於いて外社會の狀勢亦大に舊時に異なる者あり。地球上の社會は漸次に人口を増加しつゝありき。漸次に外社會の智識を増加しつゝありき。是の故に夷狄の亂は漢以前に於いても之れありしと雖も三國六朝を甚だしとなし、宋に至りて猶ほ甚だしく、遂に蒙古の支那社會を一統するを見るに至れり。明に及むでは滿州蒙古共に勢ひを張る、瓦刺の如きは明の英宗を擒にするに

至れり。西洋諸國も蒙古の侵略に逢ひ、久く文明を阻碍せしが忽ちにして之れを恢復し、和蘭、葡萄牙は最も國力を養成し、海上の利を博し、其の商估は東洋に向て其の慾望を満足せんとするに至れり。日本も其の始めは人口小に社會小なりしが幕府の建設以來武力を奨勵し、戰國時代に至り天下一統を以て志となす者多く、豊臣氏に至りて最も雄なり。支那の西方に位する諸國も亦た漸く大なり。

外國の形勢此くの如く異なり。世宗の初め韃靼の小王子屢々兵を率ひて邊境を犯かす。其の族吉靈及び俺答なる者あり。雄黠にして兵を喜ぶ。諸邊を蹂躪し、勢日に熾んなり。稱して北虜と云ふ。穆宗の時俺答を封じて順義王となし、和を講ず。

世宗の時日本西南沿海の人民屢々舟師を率ひて江南沿海の地を犯かす。嚴嵩政を執るの頃益々甚し。神宗の時日本豊臣秀吉朝鮮を征し、八道を蹂躪し、明兵之れを救ふて勝たず。秀吉死するに由りて日本兵引き去る。

然かるに滿州の族長愛親覺羅氏は遼左に起りて入寇し、其の勢猖獗なり。前後數回の役により費用支へず。屢々新税を課し、人民困苦し、盜賊四方に起る。中に付いて李自成最も強く、淮西より起りて山東に連り、關中に入り、歸りて燕京を攻め、明終に其の滅する所となれり。明の平西伯吳三桂援を愛親覺羅氏に請ひ、李自成を討じて之れを殺し、而して天下遂に愛親覺羅氏の有に歸せり。

第四節 清の一統

其一 愛親覺羅氏の領土

愛親覺羅氏は再び異人種を以て漢人種の社會を司配せり。元の天下を一統するや、夷狄の衣冠が中國を司配し、胡俗は大に中國に侵入せしが明の太祖起るに及び悉く之れを禁じ、古の俗に服せり。然るに茲に至り、再び夷狄の風俗が浸潤するに至れり。支那人の夷狄として賤みし所の者社會の上流に位し、其の風俗を浸入せしめ、而して漢人敢へて之

れと抗する者なし。力足らざるがためか。

然れども吾人は記憶せざる可からず。愛親覺羅氏は固と滿州の一族長に外ならざりしとを。一族長然かも異人種を以て支那の社會を攻服せしなることを。故に愛親覺羅氏の政府は支那の土地を以て私有となしつゝあるなり。太宗太祖朝鮮を征し、蒙古、喀爾喀、札魯特の諸部落を降服せりと雖も皆な自家の私領たりとなしつゝあるなり。聖祖の時準噶爾回疆部の一も降服し、土耳其斯坦も亦た清政府の有となれり。清政府の統轄する範圍は實に廣大なる者なり。此の廣大なる範圍の内には人種風俗言語宗教等を異にせる數個の社會あり。滿州、蒙古、漢人、西藏、土耳其斯坦、苗等是れなり。同く滿州政府の權力に服従し支那國家をなし居ると雖も社會的の原動力は容易に調和すべからざる者あると此くの如し。故に清の政府が之れを統一するは獨り武力に由るのみ。各社會は支那全體を愛するの觀念あるを得ざるなり。縦ひ之れあるも極めて薄弱なるのみ。試みに朝鮮を見よ。朝鮮は太宗の時征服せられ、其の後清の範圍とし

て見傲されたりと雖も支那社會の一部となりて支那を保全せんとするの思想は極めて薄弱なり。況んや土耳其斯坦、西藏に於いてをや。是の故に清朝の政府は勢ひ武力を以て之れに臨み、己れに降服し居る間は己れの私領なりとなしつゝあるなり。然かも我れに當然の權利ある者とはなさざるなり。詳かに言へば日本人が日本の土地を以て我が國家の土地なりとなし、天皇が之れを統御するは當然の權利なりと思惟しつゝあるが如く、其れ程強くは其れ等の諸國を統御するの權ある者とは見傲し居らざるなり。隨て今の領地を失ふも清朝政府は其れ程強くは痛痒を感ぜざるなり。其の然る所以は最優最美の文明を有し、大多數を占め居る所の漢人種の同情を以て後楯となすと比較的にならざるなり。

唯だ其れ蒙古滿州の如き古より漢人種のためには夷狄として輕視せられ文明の性質程度と大に徑庭ありと雖も永く相ひ隣比し、社會的に諸種の關係を有し、人種の差異も之れを歐州の人に比すれば甚だしく

漢人種に類するを以て彼れ等は歐州人に對しては所謂兄弟内閣、外禦、其侮の感なきにあらず、社會は、單に、一政府の、武力の、善く、統一し得る所に、あらず、支那社會の由りて維持せらるる所以の社會的基礎は此くの如きのみ。

是の故に共同の外寇なき間は反亂の起るは免れざる所なり。即ち世祖即位の初め、明の遺臣吳三桂兵を擧げて叛し、檄を遠近に移し、清の制を廢して髮を蓄へ、衣冠を明制に復し、遠近響應せり。其の孫吳世璠に至りて清兵の滅する所となる。準噶爾も叛きて復た清に降れり。而して嘉慶年間に至り、州郡亂を唱ふる者所在並らび起れり。元年張正謨が兵起り、河南、陝西、甘肅の地方に蔓延す。其の後蜀其清、徐天德等兵を起して郡縣を剽掠せり。又黑苗、吳陳受、蔡牽、朱潰等の流賊相ひ尋いで起れり。李文成、林清の徒、天主教を唱へて衆を集め、州郡を煽動せり。殊に天山南北の如き最も叛亂を極めたり。皆な清政府の討平する所となる。左宗棠は陝西の總督となりて此の天山南北の叛亂を鎮めたる者なり。其の後道光二

十五年洪秀全兵を起し、永安州を陥れ、湖南、湖北を犯し、安慶、安徽、金陵、鎮江、揚州を陥れ、官軍皆爲めに破らる。兵禍十六省に涉れり。其の徒皆な髮を蓄ふ。故に世長髮の賊と云ふ。己にして官軍會國藩、劉銘傳、曾國荃、左宗棠、胡林翼、李鴻章等をして之れを伐たしめ、遂に之れを平ぐ。

其二 外國との關係

然るに西洋の開化國は既に東方に向て効利を搏せんと欲し、來る者漸く多し。乃ち鴉片の事件に付きて英國と兵を構へ、荐りに其の破る所となり、五港を開きて英國の貿易を許し、且つ香港を英國に讓與せり。長髮賊の亂に會し、外人は之れを機とし、商業を擴張せんとし、支那船に自國の徽章を掲げしめ、鴉片の密賣を行へり。清朝政府は其れ等の支那船を追捕し、其の徽章を撤去せしめたり。英國公使怒り、米國と謀り、更らに歐州諸國を誘ひ、同盟軍を作りて清兵を撃破し、北京に向へり。而して償金千八百万兩を以て和成る。同治年間我が日本の民臺灣に漂着し、虐遇せられたり。日本政府は參議副島種臣を遣はし談判せしむ。李鴻章應接し

臺灣は其の有にあらすと云ふ。日本因りて西郷從道をして之れを討せしむ。降る。清政府は日本の臺灣を攻むるを聞き之れを拒む。日本政府大久保利通を全權辦理大臣となし。清國に派遣し李鴻章と談判すれども要領を得ず。英公使間に居りて調停し清國償金五十万を出して和す。西境の亂に乗じ魯西亞其の將「コースキー」を遣はして伊犁を占領せしむ。清國會紀澤を以て使となし。談判の後償金九百萬兩を出して伊犁の地を恢復せり。佛國安南を攻めし時清國竊かに兵を出して之れを救ふ。佛國大に怒り。順化府を攻めて其の砲臺を陥る。李鴻章佛將「ブルテ」と和を結ぶ。然るに清軍突然佛軍を襲撃せる者あり。佛國大に怒りて償金を要求せしが應せざるより戰を開き條約を以て其の局を結べり。日本は朝鮮を以て獨立國と見做し清國と天津條約を締結せり。然るに清國天津條約を破れるに由りて遂に日清戰爭を生ぜり。其の結果臺灣澎湖島は日本の有に歸せり。此の戰爭以後支那は西洋文明の利を知り。盛んに泰西文明を輸入しつゝあり。此れより以後は實に支那の社會的變遷

の一大時期なり。從來は政治的革命はあり、學問上の變遷はあり、新宗教の起れるあり、人種の混合ありき。然れども今回の西洋文明の輸入が十分に實行せられたりしならむには此れ程大なる社會的變遷はあらざりしなり。最優最美の文明を有し、大多數を占むる所の漢人種思想風俗が變化するなり。大變遷と言はざる可けんや。

其三 支那の社會心意

嚙味の夷狄に由りて環圍せられ、中華 (Centre of civilization) を以て自ら居れる漢人種悠々四千餘年、東西四百州、回顧すれば偉人傑士の輩出せる者其の數を知らず。典籍の今に傳はる者其の何千萬卷なるを知らず。其の種類の多きも亦た世界に冠たりと云ふべし。四隣暗黒なる中に於いて作り出されたる自負心は四千餘年來養成せられし所、牢乎として抜く可からざるなり。故に西洋文明に接すと雖も日本人が始めて之れに接せし後驚異の情を以て沛然として之れに向ひしとは大に其の趣きを異にすべし。「スペンサー」氏曰はく、東洋の社會人心は政治的運動あ

る毎に此度は如何なる暴君が起るやを期待しつゝありと實に支那の人情を穿てる語なり。唐虞三代の頃には人は有徳の君の起るを期待しつゝありしが其の以後は覇者の起るを期待しつゝあるなり。然るに覇者は武力を以て天下を得、武力を以て天下を治むる者なり。孔子教に由りて之れを治むと雖も君主は唯だ仁心を以てせんとし、人民は只管君主の仁心あらんとを期望するのみ。人民自ら進むで政治に與らむとするが如きは夢にも見ざる觀念なり。日本に於いては此の觀念は維新の後沛然として勃興せしが支那には向後如何あるべき。縦ひ漢人種の間に起るとするも疑懼の心を以て治者の地位に立ちつゝある所の清朝政府は勉めて之れを排斥すべきなり。然りと雖も此の觀念を養成せざれば道德興らず、人格高まらず、支那は共通なる世界的人文範圍(Kultur-Kreis)の中に伍をなすと能はざるべきなり。(Ratzelhofen, die soeologische Erkenntnis, Kultur-Kreis 看)

此の思想を養成することに由りて清朝政府は大なる打撃を感ずと雖も此の打撃に堪へて後ち始めて能く文明國の政體を實現することを得べ

し。政體は人民心意の現はるる所。先づ心意を養成するにあらざれば政體空く行はれず。清朝政府も亦た人種の差異を感せしむることを柔らげざる可からざるなり。

附 録

一、儒教史論

儒教とは何んぞや。孔子の以て聖人と見做したる人の言行是れなり。孔子は先王聖人の言行を習らひ、而して得る所ありき。其の言行は發して論語に具はる。故に論語は孔子自家の説あるにも拘はらず。後世之れを以て儒家の成典となす。儒家を道ふ着必ず論語を以て準となさるるなきなり。其の實を言はば先王の言行と孔子の言行と同からざる者あり。例へば孔子は仁を以て君子の徳となせども先王の言行には三徳九徳の名稱はあれども仁一字を以て總括せる徳となす者あらざるなり。又孔子は一人として民間に立ちて教育をなせし者、先王は天下の帝位に立ちて政を施せる者、故に孔子は教育を主として説を立て人格の修養を目的とせしが先王は天下の太平ならむとを主とせるのみ。故に先王は詩を見て以て人情を察すれども孔子は詩を學むで以て言ふあら

しめんとせり。先王は禮樂を以て天下を治めんとせしが孔子は之れを以て身を修めんとせり。故に先王の言行と孔子の言行とは同からざる者あり。然れども孔子の説は先王の説と矛盾する者あるにあらず。儒教を言ふ者は先王の説と孔子の説とを分離し以て其の異なる所と同じき所を示めざる可からざるなり。

其の相ひ異なる者あるにせよ。其の異なる所は孔子に取りて進歩のみ、自然の結果のみ。故に儒教の變遷を言はむとする者は此の順序を明かにし、孔子を以て大成者と見做さざる可からざるなり。

然らば則ち後世所謂儒教徒、即ち儒者なる者は何を指すか。何を標準として儒者と否とを判別せむか。曰はく六經を信じ、孔子の言行を奉ずる者は皆な儒教徒なり。孔子の言行を奉せざるも六經をさへ信すれば儒教徒となすべきなれども支那二千餘年の間此くの如きの徒之れあらざるなり。六經を奉ずる者は孔子を信じ、孔子を信する者は六經を奉せざるなきなり。然れども其の言行が如何に六經孔子に一致するも孔子

を、知、り、六、經、を、知、り、且、つ、口、に、心、に、之、れ、を、尊、信、す、る、者、に、あ、ら、ざ、れ、ば、儒、教、徒、に、あ、ら、ざ、る、な、り。何、ん、と、な、れ、ば、單、に、説、の、一、致、の、み、を、以、て、せ、ば、東、西、洋、孔、子、を、知、ら、ざ、る、の、國、而、し、て、其、の、人、な、き、に、し、も、あ、ら、ざ、れ、ば、な、り。博、愛、を、以、て、主、義、と、す、る、所、の、耶、蘇、は、墨、子、の、徒、弟、に、あ、ら、ざ、る、な、り。説、の、暗、合、は、東、西、古、今、屢、々、之、れ、あ、り。以、て、師、弟、の、關、係、を、定、む、べ、か、ら、ざ、る、な、り。儒、教、に、於、て、も、亦、た、然、か、り。唯、だ、其、れ、然、か、り。故、に、後、世、の、學、徒、其、の、説、は、如、何、に、孔、子、に、異、な、る、あ、る、も、口、に、孔、子、六、經、を、誦、し、心、に、之、れ、を、信、ず、る、者、は、皆、な、儒、教、徒、と、な、さ、い、る、可、か、ら、ざ、る、な、り。儒、教、徒、の、言、ふ、所、時、に、由、り、て、同、か、ら、ず、其、の、變、遷、を、叙、述、す、る、は、即、ち、儒、教、史、の、範、圍、な、り。儒、教、徒、の、な、す、所、時、に、由、り、て、異、な、れ、り。例、へ、ば、漢、初、の、儒、者、は、皆、な、實、行、を、目、的、と、せ、し、が、訓、詁、家、出、る、に、及、び、て、專、ら、訓、詁、に、従、事、し、宋、代、の、儒、者、は、一、意、思、考、に、耽、り、つ、い、あ、り、し、如、し、此、の、如、き、變、遷、は、儒、教、徒、史、の、述、ぶ、べき、所、な、り。然、れ、ど、も、此、れ、理、論、の、上、に、て、然、か、り、と、云、ふ、の、み、に、し、て、實、際、に、於、い、て、は、兩、者、を、混、同、し、て、叙、述、す、る、を、以、て、便、な、り、と、な、す、な、り。

儒教史と同じ意味に於いて道教史もあるべく、墨家史もあるべく、其の他の歴史もあるべきなり。

二、李退溪

第一章 序論

支那の東國あり、海中に突出す。名けて朝鮮となす。偉人あり、性を李氏字を混となす。實に朝鮮真城の人なり。後周村に老す。時人尊んで退溪先生となす。先生の先き、今一々之を詳かにすることを得ず。父を埴となし。母を朴となし。明孝宗弘十四年先生を朝鮮の禮安縣に生む。生れて巍々既に成人の如く長して勤勉精勵人に過ぐ。典籍に通し、兼て兵學に造詣し、朝に事へて司對寺正となり。病を以て同村に老し、専ら文學に従事し、最も力を晦菴朱子に竭す。朱子の書を抄録するもの凡そ二十卷。曰はく

混病患如前、讀書躬行、皆不能十分用工、又無朋友切磋之益、時復思之、慄惕靡容。朱子書今幾寫畢、每一人寫來、隨將元本校正。病中頗費心力。

然因此不無見到親切處、眞覺聖賢不我欺也。而難形於紙墨、以告人。答鄭子中書

と。朱子學を以て自ら任ずるや見るべきなり。朝鮮國を開てより以來、今に二千余年支那の文化に接觸し、其影響を蒙り、往來交通の頻繁なる豈我國の比ならむや。其の歴史的關係の親密にして年代の久遠なるも亦豈我國の比ならむや。王仁の書籍を我に貢獻するや、是れ神州文運の決初にして之れより以前は、まだ文字の何たるかを想像だもせざる暗黒時代、然るに朝鮮は當時恰も三韓併立の天下にして、我が國にも劣らざる時代なり。

一たび典籍の我國に傳來するや、文運は次第次第に開展し、來りて碩學鴻儒の輩出せるもの勝て敷ふ可からず。中葉以來文運の衰ふるありと曰ふと雖も、是れ實に戰亂の結果にして必然の勢のみ。是故に徳川氏の太平を基するに及んで、鬱屈せる精氣は沛然として俄かに勃興し、鴻儒碩學踵を接して出で、互ひに門戸を争ひ、論戰を逞ふし、其軋轢の猛烈な

る、殆んど水火も唯ならざるなり。素行の如き祖徠の如き程朱の説を尊奉するを敢んせず。猛鷲の才を以て宋儒數百年來の陳套を道破し、赫然齊魯の古に復歸せり。此より先き伊藤仁齋は程朱以來金科玉條として尊重し孔子の遺意なりと奉信し來れる大學を否定し以て孔子の書に非ずとし、且つ疑ひを中庸に容れ、其孔子の意に非ざる者ある所以を摘發せり。中井積善は五經に於て僅かに詩と春秋とを取るのみ。其他太田錦城の如き博學達識洽く程朱用ふる處の文字の出處を指示し、以て其學の基する所を暴露せんとす。程朱は我神州に於て破壊せられたりと謂ふべきなり。豈獨り儒學に於て如此き壯觀あるのみならんや。之を文章に徵すれば則ち祖徠の古文辭山陽の卓拔なる拙堂の簡潔なる節齋の奇麗なる岩陰の暢達なる能く明元以上を凌駕して未だ唐宗に及ばすと曰ふと雖も祖徠の如きは既に優々として唐宗を睥睨し遙かに漢以上に溯れり。翻りて隣邦朝鮮の狀勢を顧みれば吾人は實に怪訝に堪へざる者あり。何んとなれば土地の中國に近きと然るなり。運路の便なる

と然るなり。交通の古きこと然るなり、あらゆる方面に於て中國の文化を輸入するの便あるなり。然るに何故に一徠徠なきか。一仁齋なきか。二千余年の長日月を通じて彼國人の思想は那邊に彷徨しつゝ、ありしなるか、思ふに彼の國人の精神は遲緩にして進歩的に非るか。

然りと難朝鮮の地たる震古以來西土の文物運輸し來り、蓄藏し了ること久ければ則ち其人心に浸潜すること少しとせざるなり。其浸潜し朝鮮固有の思想内に於て冶鑄せらるゝ者豈遂に開展發達する所なからむや。大風の起る、一朝一夕の故に非ず、必ずや數日の順備を要せずんばあらず。

朝鮮既に英靈の氣の潜伏する所なれば則ち其氣の發現する所の者又大に見るべきものなくむばあらず。天下之を待つや切なり。時機の未だ熟せざるか、風雲の未だ會せざるか、時機熟せざるに非ず、風雲會せざるに非ざるなり。忽然として退溪李氏の生るゝあり。前史に照映し、後世に卓立し、朝鮮精氣の凝聚する所を代表し、實に支那の儒教哲學を完成せ

り。朝鮮思想の煥發する所吾人は將に氏に付て之を見むとす。

第二章 退溪思想の系統

凡そ思想の開展する必ず淵源する所あり。何人も全然新奇なる思想を講説するものなしとは一般の説なり。

退溪李氏は一もなく二もなく先儒の説を奉ずるものに非ず、一疑問に遇ふ毎に沈思黙考氷釋するを待て而して後止む。試みに其例を示さん

程子曰。心本善之説。朱子以爲微有未穩者。氣便不能無夾雜。在這裏則人固有未待發於思慮動作而不善之根株已在方寸中者。安得之善。然本於初而言。則心之未發。氣未用事。本跡虛明之時。則固無不善。故他日論之。又謂指心之本跡以發明程子意。則非終以爲未穩可知矣。(荅鄭子中書と)

然りと雖も甚だ朱子を尊崇し其範圍を出る能はざるものゝ如し。吾人

は未だ李氏の書中に於て程子朱子の議論なり行儀なりに反抗せし者あるを見ず。其學の根底する所純然朱學にあるや見るべきなり。

朱子書節要序曰。晦菴夫子挺亞聖之資。承河洛之統。道巍而德尊。業廣而功崇。其發揮經傳之旨。以垂教天下後世者。既皆質諸鬼神而無疑。百世以俟聖人而不惑矣。

何ぞ其れ推稱の至れるや。荅鄭子中書に曰はく

大抵三代以下。士大夫進退之義。莫善於宋朝諸君子。瓊山獨非議之。如此其亦陋矣。

以て朱子を尊崇し宋儒を敬慕するや見るべきなり。此を以て吾人は朱子學を以て李氏を觀せむと欲す。朱子學の儒教なるや否やは暫く之を措き。朱子は温厚なる篤行家にして聖人の徒を以て自ら任ずる者なり。退溪李氏は既に已に朱子を敬慕し其學と行とを崇重すれば則ち其朱子學者たり聖人の徒たること疑ふべからず。彼れは德行を以て人を導き長老を以て世に重んせられ。加ふるに哲學思想は發達し。事理の際に

於て窮悉せざる所なきが故に彼れ孔子の教を觀して以て謹みを外に致すとなす然り而して宋儒の學は心法なり孔子の教は禮法なり兩者の間柄鑿相容れざるが如し李子の明豈之を識らざらむや即ち曰はく凡致謹於外乃所以涵養其中也故孔門未嘗言心學而心學在其中是れ李氏根本思想の横はる所なるが故に吾人は今茲に之を詳論するを得ず吾人は唯彼れが朱子學者たると同時に孔子の徒にして毫も徠春臺等の主唱せる如き宋學非聖人學的の事なしと自任するを示さば足れり。

退溪李氏は朱子學者たるなり不幸にして彼は新知見なし然りと雖も朱子の範圍内に在りて朱子の思想は當時未だ固定せざりしが退溪李氏は之を的確明達にし前後矛盾する所なきに庶幾からしめたり然りと雖も其の進動は寧ろ無意識的にして不知不識の間に進歩せし者にして預め朱子學の闕點を洞察し以て自家の見解を組織せしものに非る如し其關係たる恰も朱子の周子に於けるが如し周子の説は本佛教

の世界觀に出で空を以て本體實有となし現象的方面に於ては即ち易の陰陽互錯の説を取れり朱子は周子を誤解し陰を以て氣即ち物質となし陽を以て理即ち原則となせり是れ周子の思想よりも一層精緻を致せる所にして哲學思想の發達せるに由らずんばあらず然るに其進動は尙ほ無意識なり李氏も亦朱子を研究しつゝある間自然此の思想に到達せる者なり。

李子の思想は實に朱子の範圍を出でず然かも朱子の學を完成せる者なり其詳細は乃ち余が本論に於て論せむと欲する所なるが故に本章に於ては但だ朱子に一步を進めたるの例を擧げむと欲す。朱子は鬼神あるを信じて曰はく

問遊魂爲變間有爲妖蘖者是如何得未散曰遊字是漸々散若是爲妖蘖者多是不得其死其氣未散故鬱結而成妖蘖若是疴羸病死底人這氣消耗盡了方死豈復更鬱結成妖蘖。

退溪李氏に至りては寧ろ此事なきが如し自省録に曰はく

禱於尼山不能必其有無。假令有之。今於叔梁紇固不可以生聖子之故而事々責其正道。又不常擿夫子之言撥訖之所爲。而有疑於夫子顯於其祖之失也。但大夫而禱山川實誼而非禮。乃應而生聖人。此又理之不可知者。故每疑此與野合事皆齊東野語之類耳。然れども其の

其得愈病。只是孝感所致。大抵孝子至誠動天地。致祥異。古今此類不可枚數。不必存疑於此也。

云へるは寧ろ主觀的の心の解釋より必然的に伴ひ來る結果なり。吾人は之を第四章に於て論せむと欲す。

第三章 純正哲學

第一節 宋儒の思想

抑も儒教哲學の以て勃興せし所以の者は孔子の教儀を研究し孔子の教儀を發達せんとせしに由る者にして實に子思に始まる。子思は誠を

以て宇宙の根本原理となし、倫理は此の誠の發現なるが故に一として誠ならざるなく一として理ならざるなしと斷定せり。然り而して上下の分君臣の義經禮三百緯儀三千皆な是れ誠の發現なるが故に天地の大道古今の通義にして秋毫も疑ひを容る可からず。苟も人生の存する以上は此の道の必然的に存する所以を證明せり。宇宙の倫理皆誠の發現ならざるなしとすれば倫理を行ふ性も亦是れ誠の發現なりと謂はざる可からず。然れども誠は哲學上絶對の語にあらずして倫理的の意味ある相對の語なるが故に孟子は其の説を承繼して直ちに以て人の性は善なりと論斷せり。是れ子思の思想より直ちに分岐せる者にして殆んど其の間に逕庭の存するを見ざるなり。蓋し儒教が一度人の思辨的攻撃に逢ふて動搖震蕩の恐れなからむと欲せば則ち之を人性の自然に本くるに如くはなし。是れ儒教哲學の起れる所以にして儒教哲學の真相を窺はむと欲せば則ち此の點に於てせざる可からず。此の故に儒教哲學は其の發程の始めより既に己に主觀的に

人性の何になるかを研究するに汲々たり。孟子の告子と性を論するが如きは以て徴す可きなり。是れより先き易哲學の起れるありと難も然かも其の觀察する所は専ら客觀的有形界にのみ限りて未だ主觀界に及ばざるなり。西洋哲學に於てもソクラテース氏が概念分析を始めたるに至りし迄は凡そ數百年の間哲學者の思想はターレスを始めとし一に皆な有形世界に彷徨して而して未だ嘗て主觀的考察に向ひしとあらざるなり。然り而してソクラテース氏が主觀的考察に進みしも子思の主觀的考察に進みしと同く外的原因に刺動せられたるに由らざるならず。乃ち彼れは詭辨學者の智識を疑ふに由りて起り、此れは孔子の教儀を研究せしに由て起れり。孟子が一たび人性の善なるを唱導してより未だ數十年ならずして荀子の性惡を唱ふるありて儒教は第二回の變遷に逢ひ殆んど震蕩せられんとせり。思想界の活劇は是れより大に目撃せられんとす。然るに不幸にして天下大亂の時となり、遂に咸陽坑火の慘を見るに至れり。荀子死してより遂に荀子なく、孟子死して

孟子なく、漢家天下を得るに及むで戰餘の後を收め、徒らに古典を講究すること之れ勉め、所謂訓詁の學なるもの一代に流行し、楊子太玄、淮南子等僅かに見るに足るものありと雖も要するに彼の戰國時代に於いて勃興せる哲學思想は火の消へたるが如く全く朴滅し、滔々たる訓詁學の潮流は太平の波を浮べて二千餘年を流過し、而して宋に至る。是れより先き、三國六朝以來佛教の研究盛んに行はれ、其眞理は切りに唱導せられ、所謂佛教哲學なる者は怒浪の勢を以て人心を支配し、主觀的考察をして盛んならしめたり。此の思考法 (Denkungsweise) は宋代に及び諸先生をして純然たる哲學的頭腦を有せしめたりき。彼れ等は固より儒教徒なり。故に佛教に降るを肯んせず。然れども其の甚深なる哲學思想に至りては實に垂涎の至りに堪へず。是に於いて儒教に於いても佛教の如く甚深なる眞理を得むとするに熱心なりき。恰も好し多年鬱屈せる儒教の主觀的説明は得々として彼等のために哲學的に考察せらるるに至れり。

彼れ等は二千餘年の古に溯りて孟子の唱導する所と子思の創始せる所との果たして何事なるやを研究せんと試みたり。然るに彼れ等をして古人よりも一層歩武を進ませし所以の者は實に荀子の攻撃に由る。彼れ等以爲らく性に善ありと云ひ性に不善ありと云ふ。是れ性の何物たるやを認定せざる可からず。然るに彼れ等の腦髓には孟子の先天良心論が先入主となり頑として動かす可からず。一方に於いて日常の經驗に於いて性惡なる如き者あり於是彼れ等は兩説を調和するの必要を感じ。之を調和せんとならば前者に重きを置かざる可からず。前者に重きを置かんとすれば、善を以て先天的となし、天地自然の道となさざる可からず。彼れ等は天地自然の性の何たるかを説明するに於いて始めて純正哲學に入れり。此れ宋儒の哲學思想にして程朱皆な是れなり。而して李退溪其人の思想も亦た此の到達せる域に在るものなり。

第二節 宇宙論

何をか宇宙となす。目を開けば森羅萬象日月星辰鬱然として眼前に現はれ、目を閉れば雜然として萬象の心前に浮ぶを見る。一閉一開亦是れ何等かの用にあらざるなく是等を總括して宇宙となす。然り而して去年の花は今年の花に非らず。今年の方は去年の人に非ず。日月往來四時推移、時を逐ふて變遷するものも一刻の克く底止するなしと曰ふ。雖も花の常に紅に烏の常に黒に魚の長く人の直なる是れ同一の範疇に入らざるなし。於此乎吾人をして何等か其間に理法の概括するあるを思はしむ。若し夫れ塊然たる形氣は云ふも更なり。愚夫も疑ふ所なく。匹夫も識らざる所なく。目あるものは見、耳あるものは聞く。然るに所謂理法なる者に至りては多少の智的進歩を遂げたるものに非れば能はざるなり。此に於て稍々材智ある者宇宙に於て理法と形氣との二を感得せざるなし。然るに理法と形氣とを分ちて判然區別あるものとなすは

哲學者に非ずむばあたはざるなり。是れ即ち宋儒の區別法にして彼等は從來の思想を繼承發達しながら宇宙を解して理氣の二元となせり。理とは理法なり、氣とは形氣なり、退溪李氏は又朱子の説に従て理氣の二を唱導せり。然れども氏は之を以て二元となさず。寧ろ一物の二成分とせり。換言すれば凡そ萬有と云ひ吾人の見聞接觸すべき者は皆是れ理と氣二者の結合なり、理獨り見聞接觸す可からず。又氣獨り見聞接觸すべきに非るなりと、此故に理氣を生ずるに非ず。氣理を生ずるに非ず。二者は同く宇宙に併存し瞬時も離隔すべきに非るなり。理なきの氣なく氣なきの理なし。然り而して二者を別つ所以の者は寧ろ主觀的に之を分拆するのみ氏は大に分拆法の利を主張し、好んで此法を用ひたり。曰はく

夫講學而惡分拆。務合爲一。説古人謂之鶻圖吞棗。其病不少。云云

と。即ち氏をして大に其思想を進捗せしめし所以なり。此に於て抽象的物象と本體的實在とを識別して理を以て前者に屬し決して此を後者

と混同するとなかりき。豈彼のプラトーンが西洋哲學第一流の大家として千古不滅の墨痕を留めながら猶ほ純然たる妄想に馳せ概念を以て實在と信認せるが如く然らむや。退溪李氏は判然此兩者を識別して以爲らく理は實在に非ず物の法則なり、萬物より抽象し得たる觀念に過ぎず。此故に理と氣とは主觀的に之を區別すれども客觀界には二者常に同伴し決して別つべき者に非ざるなりと。曰はく

盖理之與氣。本相須以爲體。相待以爲用。固未有無氣之理。亦未有無理之氣。然而所就言之不同。則亦不容無別。杏奇彦明書自省錄

と。又曰はく

示喻。形而上下之説。則見得殊未端的。説得仍未明快。請畧言之。凡有貌象形氣。而盈於六合之内者。皆器也。而其所見之理。即道也。道不離器。以其無形影可指。故謂之形而上也。器不離道。以其有形象可言。故謂之形而下也。云云 杏李宏仲書辛酉

混然たる宇宙之を哲學的に觀すれば則ち理氣の二となる。然らば則ち

何をか理となし、何をか氣となす、請ふ之を詳かにせむ。

第三節 理とは何んぞや

然り而して退溪李氏の所謂理なる者は單に無塊の條理たるに止まらず。人は人たるの理あり、鳥は鳥たるの理あり、花は花たるの理あり、玉は玉たるの理あり、一も紛錯する所なし。然るに實際宇宙の現象を觀すれば花にして花ならざるあり、是れ何んぞや、理が完全に發現するを得ざるなり。其發現し得ざる又其原因の存するなくむばあらず。退溪は之を氣に歸せり。曰はく

氣若反理時、理反隱、非理之弱、乃勢也。

若し理を以て形而上のものにして已とすれば則ち豈理に反するの氣あらむや。氣が先づ事を用ひて而して理は自ら其中に存す可きなり。然るを彼れ或は反理と云ひ或は勢と云ふを以て見れば彼が思想に浮べるものは單なる形而上の者に非ると又以て見る可きなり。吾人は氏が

觀念する所のものを案するに彼れは理を以て單なる無形而已とせず、實に理想なりとなすを見るなり。理想とは何ぞ即ちプラトーンの所謂概念の如く萬有の各理想たるなり。

實際の宇宙には此種の理想が數多存在して各物には各物の理想あり、各事には各事の理想あり、凡そ吾人の見聞接觸する所の事物は恰も理想に契合せずと雖も還た大に近似せる者なり。曰はく

若指其一物而言之、其偏處固偏矣。若總指其無物不在而言之、尤可以見其全體之渾淪矣。何者理之爲體、不囿於氣、不局於物、故不以在物者之小偏而虧其渾淪者之大全也。答李家仲書辛酉

以て彼の所謂物の偏とは理想の全からざるなるを見るべきなり。個々の物が偏なる故に宇宙に理想なしとなす可からざるなり。理は物に局せられず。氣に局せられず。美玉の瑕なきが如く、玲水の波なきが如し。若し彼の倫理的の理を説破する所を見れば一層之を明にするを得む。曰はく

至於其未。則乃以氣之自然發見。爲理之本體然也。是則似。遂以理氣爲一物。而無所分實。若真以爲一物。而無所分。則非混之所形知。云云。程子仲漢無朕。万象森然。云云。朱子曰。此言未有這事。先有這理。如未有君臣。已有君臣之理。云云。

以て如何に理の理想たるかを見るに足るべし。蓋し以爲らく君臣父子其理を悉くすもの稀なりと雖も其の理の如きは古今に亘りて不變不易なる者なりと。

吾人は前文に於て氏の所謂理なる者を詳論せり。若し如此理が理想となり無數に有之と爲せば則ち個々獨立して何の連続なきか。若くは一貫する所ありやの疑問起らざるを得ず。果して連続する所なしとせば吾人何に由て天地一體渾淪融合の妙を見むや。退溪李氏の思想を探究するに實に總腦する所あるが如く然り。曰はく

大。低。天。下。万。物。只。一。理。重答黃仲舉自省錄

第四節 氣とは何ぞや。

吾人は前節に於いて理の何になるかを觀察せり。然りと雖も

未有無理之氣。亦未有無氣之理。

理と氣とは實際世界に於いて融合して離る可からず。理は吾人の分拆し得たる所に外ならず。故に理の何になるかを知ると雖も氣の何になるかを知らざれば宇宙解釋の完全なるものにあらざるなり。退溪氣を解して曰はく

氣有生死。理無生死之語。得之。

と。退溪の所謂氣なる者は宇宙を構成する所以の原理にして見聞接觸すべき者を作るは即ち氣あるがために外ならず。然りと雖も氣が即ち是れ見聞接觸すべき者なりと曰ふにあらず。何んとなれば

盖理之興氣。本相須以爲體。相待以爲用。

吾人の見聞接觸し得る所の者は即ち既に理氣の融合せる者なればな

り。是の故に退溪の所謂氣なる者はデールカルト氏の物體と同一理想に從て形成せらるべき所以の質料なり。

退溪が氣に生死ありと云へるは凡そ有形の者は皆生死あり故に氣も亦た然かりとなせるのみ。其の實を言へば退溪の思想を推すも彼れの氣は即ち質料 (Materie) にして常住不滅なるべき者なり。然るに理氣の合成なる個々の物象は生死あり。退溪は此の前後兩者を區別するをなさず。是れ未だ思想分拆の及ばざりし所なり。

然り而して氣は其の固有なる一定の法則を有し。然かも此の法則は理とは絶對的の相異なる者なり。故に氣が理の法則の如くならざるとあり。理の左せんと欲する所、氣卻て右せんと欲する所なきにあらず。此れを以て兩者の調和極めて惡しとなす。然りと雖も氣が此く理に反するところありと雖も氣に取りては寧ろ無意識的なるのみ。換言すれば氣は盲目的に活動し。以て理に抵觸するところあるを致す者なり。故に曰はく

氣若反理時。理反隱。非理之弱勢也。

と。是れ氣の盲目的活動あることを示めすにあらずして何ぞや。又曰はく

不囿於氣。不局於形。

と。即ち理想が實現せんとするに當り。是れと全く性質を異にし。且つ其れに固有なる法則を有せる氣を使用せんとするを以て其の意の如くなるを得ざるなり。之れを倫理的實例に就いて觀察すれば君にして君ならざるものあり。父にして父ならざる者あり。自然的現象に就いて觀察すれば玉石にして結晶の正整せざる者あり。花にして瓣の齊からざる者あり。凡そ天下の偏なる者は理の氣と調和せざるより起る。然れども理は如何なる場合に於いても完からざるなし。但だ氣の之れに慚合せざるのみ。

理は退溪の思想に在りて理想にして現象の準則する所の法則なり。近世の形而上學者の唱導する實在とは大に逕庭ある者なり。實在は何等の規定すべきなく。現象の基礎となり。現象を現し得る者なり。希臘哲學者の *Notos* は近世の形而上學者の實在と稍々相ひ異なる者にして能く

一切現象の原理たる者なり。然かるに退溪の所謂理なる者は同く理想にして抽象的の者たるに止まらず、何分か實在的の意味あるとは疑ふ可からざるなり。

然らば何が故に氣が多かれ少かれ理に準則するか、退溪の思想に於いては單に其の事實あるとを示すのみにして其の理由の如何んを示めざるなり。氣は盲目的に活動する者なるが強いて之を名すれば氣が内包的に有する氣的法則となすべきなり。

退溪の氣に關する説は何れより來りしかと云ふに即ち亦た朱子より來たれる者なり。朱子は周子の太極圖を誤解若くは曲解して陽の動は太極の行はるゝ所以、陰の靜は太極の體の立つ所以となし、二元論を發明して理氣の説をなせり。而して理を以て形而上となし、氣を以て形而下となせり。曰はく。

理形而上者。氣形而下者。自形而上下者。言豈無前後。理無形。氣便粗有渣滓。

又曰はく。

人物之生。天賦之以理。未嘗不同。但人物之稟受。自有異耳。如一江水。備將杓去取。上得一杓。將梳去取。上得一梳。至一桶一甕。各自隨器量。不全。故理亦隨以異。四語類

と。是の故に退溪の思想は朱子より出でたる者なり。氣の内包的に有せる法則を氣的法則となし、理を以て理的法則と命名すれば、理的法則は前章論述せる所に由りて之を見れば倫理的法則と自然的法則との兩者を包含する者なり。理的法則は其の種類甚だ多けれども氣的法則は單に氣の一般性質にして極めて簡單なる者なり。

第五節 理氣何れが先きなる

支那の哲學者は一切の現象は理氣の二元より成り、相ひ離る可からざる者なるを口にすと雖も、理氣何れが先きなるの問題に際し、迷はざる者幾んど稀れなり。本來「先きなる」と云ふは時間の順序を指す者にし

て理氣の中何れが先づ存在し、何れが後に生ぜしやと云ふに外ならず。理氣は兩輪の如く兩翼の如く相ひ離る可からざる者とすれば則ち此れに生起の時間的順序あるべからず。故に此の問題は彼の哲學に對して起り得べき性質の者にあらず。然るに彼の徒の中には往々にして此の問題を提起する者あり。而して彼れ等も此の問題に際して時に霧中に彷徨するとなきにあらず。其の然る所以の者は、吾人の思想は一事に就いて思考する時は必ず之れを何等か寫象するとなき能はず。寫象するには何等か心像の心前に浮び來ることなき能はざるなり。故に理論的には實在は時間空間を超越し居れども實在に付いて思考しつゝある瞬間は或る心像の浮び居るとなくむばあらず。而して理論力の未だ成熟せざる時は此の心像を實物と誤認し、例へば實在は目に見え得る如く存在するとの觀念を懷くに至る。

今ま此の問題に關し、五里霧中に彷徨しつゝある哲學者は亦た此の程度に在る者なり。彼れ等は理は理想にして氣を離れて實在すべき者に

あらざるを知る。然れども理の心像は彼等の心前に浮かび居り、而かも恆久不變なりと稱せらる。此を以て彼等は時として氣よりも理の方が恆久不變にして隨て宇宙の始めより存在し、氣は其の後に生ぜりとなす。然かれども、直ちに理論の浮び來るあり。曰はく、氣が若し生起せし瞬間ありとすれば則ち無有を生せるなり。如何んぞ、此の理由あらむと。彼等の腦髓は此くして紊亂せられ、彷徨せらる。左の一句は朱子の此の心的進動を示めすに足る。曰はく、

或問先有理後有氣之說。曰不消如此說。而今知得會下。是先有理後有

氣邪。後有理先有氣邪。皆不可得而推究。然以意度之。則疑此氣是依傍

這理行。及此氣之聚。則理亦在焉。蓋氣則凝結造作。理却無情意。無計度。

と。其の此氣是依傍這理行。及此氣之聚。則理亦在焉。と云ふを以て見れば理は氣と常に相ひ偶するを知り、不消如此說と云ふを以て見れば理氣前後なきを知るなり。其の皆不可得而推究と云ふを以て見れば其の心中決せざる所あるを知るなり。此の如き句があるかと思へば又理が先

きなりとなすものあり。曰はく。

或問。必有是理。然後有是氣。如何。曰。此本無先後之可言。然必欲推其所從來。則須說先有此理云云。

と。又曰はく

未有天地之先。畢竟只是理。有此理。便有天地云云。

と。又曰はく

先有箇天理了。却有氣云云。

と。然かも其れ等各句の後ちには氣の聚結する所便ち理の偶存する所以を附記せり。要するに朱子の説は理論的には理氣相ひ偶合する者なりと雖も思想未だ明晰ならず。時に理先氣後の語を放つとあり。退溪氏に至りては寧ろ此の弊なきが如し。曰はく。

蓋理之與氣。相須以爲體。相須以爲用。然而所就而言之不同。則亦不容無別。從古聖賢有論及二者。何必滾合爲一説。而不分則言之耶。且以性之一字言之。子思所謂天命之性。孟子所謂性善之性。此二性字所指而

言者。何在乎。初非就理氣賦與之中。而指此理原頭本然處言之乎。由其所指者。在理不在氣。故可謂之純善無惡。若以理氣不相離之故。而欲兼氣爲説。則己不是性之本然矣。

と。彼れは所就而言なる一語を用いたため、其の思想は大に精確になるを得たり。就いて言ふ所とは今日の語にすれば方面と云ふとにして、一切の現象は理的方面と氣的方面とあるなりとなすに外ならず。

理氣論者が理氣の先後に付いて五里霧中に彷徨せしは又た他の原因の存するなくむばあらず。何んぞや。歴史的の影響是れなり。理氣の説は周茂叔の太極圖説に出るとは前に述べたる如し。太極圖説の太極は即ち後儒の謂ふ所の理なり。然かも太極は分れて陰陽となり、五行となるに由りて知り得べきが如く一大元氣なり。且つ此の一大元氣は天地創造の以前に遡り、カントラプラーヌの星霧説の如く物質的ならざるにせよ、兎に角、其の渾沌たる一大元氣を指すとは疑ふ可らざるなり。故に理氣論者の理の觀念とは大に相ひ同からざるものあり。此を以て彼れ

等は理氣を主張すれども、歴史的先系たる周子の太極の觀念に由りて影響せられざるを得ず。然かるに太極は天地に先ちて存在する者なり。是を以て理も亦た天地に先ちて存在せざるあらざるなり。周子の思想を直接に受けたる朱子は其の關係の近きために周子の思想に由りて影響せられたれども朱子より出でたる退溪は其の關係の間接なるために此くの如き影響を蒙るなきなり。

第六節 理氣説より見たる心

凡そ天下の現象一として理氣の合成ならざるなしとすれば則ち心も亦た一現象なるを以て理氣の合成なりとなさざる可からず。故に朱子の如きも心に理氣ある所以を主張せり。然れども善く其の心底に横はれる觀念を探明するに彼れは心を以て氣なりとなす者なり。即ち曰はく心者氣之精爽語錄と。而して性を以て心の中に備ふ所の理となせり。未だ理氣が相ひ集まり而して心の名を附すべしとの觀念を有せざり

しなり。何んとなれば心は氣の精爽なりと言ひ放てば理はなくとも心たり得るや明かなればなり。朱子は之れに答へて曰はむとす。氣の聚合あれば茲に理の附與せらるゝありと。果して然らば益々以て氣と理との相ひ慥合せざるを見るべきなり。何んとなれば氣は已に聚合し了り。而して理の之れに附與せらるゝを以てなり。退溪の思想に據れば氣は理に従て聚合する者なり。是の故に理は氣の聚合其物の中に形と體との如くに必然的に偶合し居る者なり。隨て彼れが心を解するも明拆なるものあり。曰はく

心統理氣

退溪の哲學より伴ふべき當然の結果なり。然るに心は吾人の直覺に觸るゝ者にして、而かも一切の理論は皆な心に於いて之を知覺す。是の故に退溪の理は一切心に於いて之を直覺すべきなり。是の故に彼れは理は心に於いて總攝せられ居るものとなせり。先きに述べたる天下万物只此一理と云へるものも畢竟此の直覺より得たる結論に外ならざ

る。なり。論理的に。一理に。總合せられ。居ると言ふに。あらざるなり。是れ。大に。注意すべき所に。屬す。由來支那の學者中。には。此種の論鋒。太多し。退溪は。直覺より。一切の理は。心に。總腦し。居る者となせり。心は。一人に。屬すれども。天地萬物に。普遍なる者となせり。元來此の思想は。宋學者の。泰斗たる。程子より。來れる者なり。程子の。説に。據れば。心は。性を。備へ。性は。自然の。理にして。天地に。普遍なる者なり。故に。退溪は。程子の。語を。引きて。曰はく。

一箇腔子通天地萬物。只此一理。云云。故曰。一人之心。即天地之心。と。又曰はく。

天下之理。管於心理。雖散在乎萬物。而其用之微妙。實不外一人之心。初不可以内外精粗論也。

と。朱子の思想に於いても。一切の理は。心に。附與せられ。居るとなすに。外ならざるなり。此れ等諸家は。皆な直覺的に。一切の理が。心に。備はり。居るとなすに。外ならざるなり。而して。退溪が。萬物の。理は。心に。總腦せられ。居

ると云ふも。單に。理の。方面を。指せるのみ。氣は。則ち。然からざるなり。故に。彼れは。理の。方面のみより。言へば。各一の。心は。同一なれども。氣の。方面に。於いて。相ひ。殊別せられたる者となせり。彼れは。感覺を。以て。之を。氣に。屬するが如し。曰はく。

七情之發。程子謂之動於中。朱子謂之各有攸當。則固兼理氣也。然而所指而言者。則在乎氣何也。外物之來。易感而動者。莫如形氣。

と。感覺を。以て。氣に。屬するや。明かなり。而して。彼れ。又。程子の。他人。食飽。公無。餒乎の。語を。引き。以て。心は。絶對。普遍の。者にあらず。各人に。殊別あるを。明かに。せり。故に。心に。就いて。論ずる時は。理の。方面と。氣の。方面とを。區別せざる可からず。左の。一句は。最も。善く。理と。心との。關係を。説きたるものなり。曰はく。

恐不當云自在心者。片々分來也。且來喻在心在事。只是一理者得矣。但又云所謂一本者。指理之總腦處。非指在心者。夫既曰只是一理。則理之總腦不在於心。更當何在。但須知在心在物。本無二致。處分明透徹。然後

始爲眞知。苟爲不然。漫曰。只一理。則恐於一本万殊處。猶有所未瑩也。と。即ち彼れ心を以て衆理を具備し。此の衆理が即ち日常行爲の形式たり。又た万物の法則たるなりとす。是の故に心は理の方面にては普遍的にして氣の方面に於いては殊別的なり。

心の性質此くの如し。故に彼れは心を以て太極となす。陳北溪の説に反對せり。蓋し北溪の説は明かに佛教思想の影響を受け居るものにして。然かも其の影響は甚だ大なり。北溪の意に據れば。陳幾叟が月落萬川處々皆圓と言ひし如く。太極は一切の現象に本體となりて存立し居る者なり。故に太極は一にして多、多にして一なり。是を以て太極は今日の形而上學者の所謂實在と同一なるものなり。此れ退溪氏の非難する所なり。曰はく

前論心爲太極。北溪之説。細思之。終是有病。中略。朱子大學或問補亡章。心主一身。理在萬物。互爲體用之論。云云。推之。可知北溪之説爲未釋。

彼れの思想に據れば。心に存する者より見れば。體にして其の萬物に行

はれ居る所より見れば。用なり。心に存する者と萬物に行はれ居る者と二にして一、一にして二。然かも一切現象が悉く此の心を具備すとす。にあらざるなり。

第七節 結論

要するに彼れの純正哲學は朱子より出で、理氣の二元を以て宇宙の根本原理となし。一切現象は此れ等二者の合成に外ならずとなすなり。理は理想にして、又法則にして今日の形而上學者の觀念せるが如き實在にあらす。寧ろ形式に近きのみ。然かも此れ等の理想は心に於いて統一せられ居る者なり。而かも此の統一は直覺せらるゝ所なり。氣は質料にして其の内包的に有する法則あり。故に氣理相ひ調和せざるとありと雖も大體に於いては理に準つて形成せらるゝ者なり。而して心は理と氣とをも包ねるものなり。

果して然からば氣理の關係は如何。氣は如何んして理に準つて形成せ

らるゝや。此れ退溪の哲學に於いては明かならざる所なり。終りに臨むで理の觀念の變遷に付いて一言すべし。理が始めて主張せられしは程明道の時に在り。程明道は未だ理と氣とを分けて二となさず。性即氣と解せり。然かも性を以て道となし理となせり。而かも氣の一字には歴史的なる一大元氣の觀念が含蓄せらる。此を以て明道の理は其れ自身力學的に實在する者と見做すを得べし。朱子に至りては理と氣とを分ち、理を以て周子の太極、程子の性となせり。故に何れにせよ、猶ほ多少實在的ならざるを得ざるなり。然るに以後は朱子を出發點とし理と氣とを對照せしむる故に一は形式一は實在と見ゆるの外なし。羅整菴、吳延翰、伊藤仁齋の如きは是れなり。故に是れ等の學者は二元論と云はむよりは寧ろ氣の一元論者なり。退溪も朱子の如く其れ丈遙か理に實在的の意味を帯びしめざるなり。

第四章 實踐哲學

第一節 總論

吾人は前章に於て退溪李氏の純正哲學を論述し了れり。今より進んで實踐哲學に論入せむと欲す。實踐哲學は純正哲學と親密に關係し純正哲學より直接に演繹し得たる者たるのみならず、或る方面より見れば純正哲學夫れ自身なりと謂ふ可きなり。何んとなれば支那の哲學は先づ宇宙の眞理を求め、然る後倫理的法則を演繹したるに非ずして倫理的法則を推演して之を純正哲學に歸したる者なればなり。然りと雖も此く推演するにも古今により異なるなきに非ず。子思は即ち倫理的意味ある誠を以て宇宙の根本主義となし、宋儒は即ち理を以て宇宙の根本となし、其中に自然的法則と倫理的法則とを包括せり。立言の様式は種々ありと雖も倫理的法則を執りて之を自然的法則と同班に列するに至りては則ち一なり。然るに子思以下に至り、倫理的法則は人心以内にありと直覺し、遂に自然の法則も亦人心以内に在りと推論せるは蔽ふ

可からざる事實なり。此故に自然的法則を論ずる時は倫理的法則は同一の様式に従て取り扱はる可く、純正哲學即實踐哲學なりと曰ふ所以なり。カント以爲らく現象世界の法則は人の悟性に在りて倫理的法則は理性に在り。前者は必然的にして後者は自由なり。其間隔實に絶對的なりと。今宋儒は則ち然らず。倫理の法則も自然の法則も同く我心に具備し倫理の法則の必然なるは自然の法則の必然なるが如く其間自由不自由を區別す可きに非るなりと。即ち倫理哲學の純正哲學に對する關係は今再び之を論述するの要なし。理の先天的に我心に具備するは前章之を詳論せり。其の理の中に倫理的法則を含有するが故に倫理的法則の純正哲學的研究は業に已に其効を告げたりと謂ふ可し。退溪曰はく

此理無内外。無分段。無方體。方其靜也。渾然全具。是及本。固無任心在物之分。及其動而應事接物。事々物々之理。即我心本具之理。但心爲主宰。各隨其則。而應之。豈待自吾心推出。而復爲事々物々之理。

と。以て彼れが倫理的法則を先天的に具備すとすを見るべきなり。然らば則ち實踐哲學にのみ其研究の對象として殘留する所の者なきか。曰はく然らず。以上は實に法則に付て論せるのみにして未だ能力に關しては一語の之に及ぶなきなり。能力とは何ぞや。曰はく實踐的法則を實行すべき所以の者にして例へば性及び情の如し。吾人は進んで之を研究せむと欲す。

第二節 性

支那哲學の根本に横はれる思想は倫理なり。而して孔孟が性に付いて言説を費せしより性の論は彼等の間に一般の問題となれり。然るに先秦時代に當りては性の論は彼此紛々として猶ほ一定せざるなり。孟子の如きは性を以て善となせり。荀子は性は抽象的なれども人間生れながらにして情慾あり。此の情慾を縦まにする時は即ち社會の交際に惡結果を來たす者なりとせり。告子は生れながらにしては善

もなく悪もなく教育如何に由りて或は善となり或は悪となるべきなりとなせり。漢代に至りては先秦思想の複習なるを以て、先秦に於ても激烈なりし性の論は殆んど一切の學者に由りて弄せられたり。董仲舒淮南子楊雄劉向を始めとし、班固王充王符の如き哲學者としては史的價値を有せざる程の學者も亦た皆な之れを口にせり。然れども彼れ等は猶ほ性を解して生れ付きとなし、生れ付き悪なるか善なるか、將た善悪なきかに就いて論じ、性の字を以て即ち善とか即ち悪とかなざるなり。

然るに宋代に及むでは一轉して性の字は理と同一にして善と同一なりとせられたり。明道然り。伊川然り。况んや伊川より出でたる朱子に於てをや。朱子は性を以て理となし、曰はく、性則理也。發者情也。其本則性也。如見影知形之意と、退溪も亦た性の字を以て理となせり。曰く、

若以理氣不相離之故而欲兼氣爲說則已不是性之本然矣。夫子思孟子洞見道體之全而立言如此者非知其一不知其二也。誠以爲雜氣而

言性則無以見性之本然故也。經於後世程張諸子之出然後不得已而有氣質之性之論亦非求多而立異也。所指而言者在乎稟生之後則又不得不以本然之性稱之也。

と是れに由りて觀れば人物の生まるゝや、理と氣とを受く。其の理の方面のみを見れば即ち是れ性にして、氣を雜へて之を言へば則ち已に本然の性にあらざるなり。

然るに心も亦た理氣を統ふる者、性と如何なる關係がある。退溪の語録に在りては未だ之を發見すると能はざるなり。意を以て之を推すに、朱子が心は水の如く、性は水の靜かなるが如しと言ひしが如く、本と同物に付いて一は靜的方面より見、一は動的方面より見たるなるべし。彼れが心に付いて言ふ所は性に就いて言ふ所と相ひ啓發する者あり。彼れ程子と朱子との異を調和して曰はく、程子は心は本と善なりとなす。此れ理的方面より見たるなり。氣には夾雜あり。然れども其の未だ發せざるや不善あるとなしと。

程子心本善之說。朱子以爲微有未穩者。蓋既謂之心也。是兼理氣。氣便不能無夾雜。在這裏。則人固有未待發於思慮動作而不善之根株。已在方寸中者。安得謂之善。故謂之未穩。然本於初而言。則心之未發。氣未用事。本體虛明之時。則固無不善。故他日論此。又謂指心之本體。以發程子之意。則非終以爲未穩可知矣。

此れ氣の未だ事を用いざる際には善惡なく。氣の動くに及むで善惡あるなり。此れ論理の未だ整合せざる所なり。動いて善惡あるは動かざる時に已に其の萌芽なき能はざるなり。

第三節 情

情の論も亦た宋儒の哲學に於いて議論多き問題の一なり。其の然る所以の者は性を以て理となし、倫理其物となしたるため、情は此の見點より解釋せられざる可からざればなり。前節に述べたる如く性の字は先秦と宋とに於いて非常なる差異あり。情の字も之れと同一先秦時代に

は但だ人情と云ふとに外ならず。孟子が或る人の問ひに答へて夫の情の如きは以て善をなすべしと云へるは情と性とを區別せざる明徴なり。漢に及むで性情は熟字をなし、其に屢々論せられたり。然るに猶ほ情は動く方面に付いて云ふのみ、宋代に及むでは性が實在的なる者となりし故情との區別も亦た明かにせられざる可からざるに至れり。

此に於いて理氣論者の立脚地よりは情は性の動ける者と解釋するを以て適當となす。故に朱子は心を水に喩へて、性は水の靜かなる如く、情は水の流るゝ如くとなせり。朱子は更らに進むで四端七情の出處を示めし、以爲らく四端は性より發し、七情は四端より發すと。然るに此説の缺點を擧ぐれば四端は倫理、七情は倫理にあらず。七情が如何んして四端より出るや此れ了解すべからざる所なり。退溪は即ち以爲らく心は理氣を統べ、四端は其の中の理より出で、七情は其の中の氣より出づと。曰はく

惻隱羞惡。辭讓是非。何從而發乎。發於仁義禮智之性焉爾。喜怒哀懼愛

惡欲何從而發乎。外物觸其形而動於中。緣而出焉耳。四端之發。孟子既謂之心。則心固理氣之合也。然而所指而言者。則主於理何也。仁義禮智之性。粹然在中。而四者其端緒也。七情之發。程子謂之動於中。朱子謂之各有攸當。則固亦兼理氣也。然而所指而言者。則在乎氣何也。外物之來。易感而先動者。莫如形氣。而七者其苗脉也。

と。是れ明かに朱子より出で、朱子に異なる所。此れ自己の創見なる所以を述べて曰はく。

至於後世程張諸子之出。然後不得已。而有氣質之性之論。亦非求多而立異也。所指而言者。在乎稟生之後。則又不得純以本然之性稱之也。故愚嘗妄以爲情之有四端七情之分。猶性之有本然氣質之異也。然則其於性也。既可以理氣分言之。至於情。獨不可以理氣分言之乎。
と。朱子の哲學は茲に至りて大成せられたりと謂ふべきなり。

第四節 工夫論

支那の倫理學は倫理の何になるやを論ずる部分と倫理を實行する所以の方法を論ずる部分とあり。孔子の時より宋儒に至りて兩部分は愈々發達し、全く獨立なる部分となり了れり。

孔子は倫理に遵由せよと云ふに過ぎず。孟子は倫理は先天的に各人の具備する所なるが故に之れを求む可しと云ふに過ぎず。宋儒に至りては倫理は天地自然の理にして各人の先天的に具備する所故に之れを實行せざる可からず。然るに之れを實行するには先づ精神を鍛練せざる可からずとなすに至り。精神鍛練の法が一個特別なる部分をなすに至れり。工夫論是れなり。程子朱子皆な此の論あり。退溪即ち工夫の第一義は事々心を細にするに在るを論じて曰はく。

明道寫字時甚敬。固非要字好。亦非要字不好。但敬於寫字而已。字之工拙。隨其才分。工力而自有所就耳。此即必有事焉而勿正心。勿忘勿助長之見於事者。乃聖賢心法如此。不獨寫字爲然也。故朱子亦曰。一在其中。點々畫々。放意則荒。取妍則惑。所謂一則敬也。來喻謂欲使學者不必工

於書藝此非程子之意而又云故爲不好其去程子之意益遠矣。

と字を寫すに當たり、一點一畫、謹むべきと此くの如し、萬事須らく此の如くなるべきなり、其の直接倫理に關する者に就いては即ち曰はく、

蓋此理洋々於日用者、只在作止語點之間、彝倫應接之間、平實明白、細

微曲折、無時無處無不然、顯在目前、而妙入無朕、初學舍此、而遽從事於

高深遠大、欲徑捉而得之、此子貢所不能、而吾輩能之哉、云 延平曰、此

道理全在日用熟處、旨哉言乎。

と即ち字を書するの心得を以て日用應接の間に處すべきなり、此くの

如くして功を積むと久ければ則ち天下一切の理、擧げて目前に在り、恰

も理論的に知り得たる天下一切の理は意識の中に一目瞭然として現

はれ來り、事に應じ物に接し、自然に行はれて礙碍なしとなり、故に退溪

の工夫論に於ては倫理の意識を有すると同時に此の倫理を實行し得

る精神組織を豫想する者なり、是の故に彼れは老佛の徒らに空寂を好

むを排斥せり、曰はく

と又曰はく、

彼莊列之徒、徒知厭事好靜、而欲以坐忘爲道之極致、殊不知心貫動靜、該事物、妄意作之、愈見紛拏、

と又曰はく、

如欲并此而無之、則自堯舜禹湯精一執中、顏冉請事斯語、皆可廢、而必

如佛老、枯槁寂滅、而後爲學之至也、奚可哉、

と佛老は心に倫理なきの空なり、故に眞の空なり、退溪は即ち心に倫理を具へ、礙碍なく之を行ひ得むとを期す、是れ大に同からざる所以なり、

第五章 結論

以上余は退溪の哲學は朱子より出で朱子の及ばざる所を發明したるとして之を論述せり、其の哲學は理氣の二元を立し、理は理想にして各人の心に於いて一切を直覺し得べく、隨て彼れは一切の理は心に於いて總腦せらるるとなせり、之れ論理の未だ徹底せざる所氣は即ち質料にして理に從て形成せらる、而かも兩者の關係は遂に明かならず、心を

以て理氣を統ぶるとなし。四端は其の理的方面に出で七情は其の氣的方面に出づとなすは朱子に一歩を進めたる所なり。工夫論は退溪の書に於いて見る所は頗る簡單なれども吾人學者の當に務むべき所たるを失はず支那の哲學が朝鮮の人に由りて大に發揮せられたるは又た奇なりと謂はざる可からず。

附録

六八四

支那思想發達史 終

明治三十六年十二月三十日印刷
 明治三十七年一月二日發行

支那思想發達史與付
 定價金壹圓六拾錢



發兌書肆

(明治廿九年六月設立)

合資會社 富山房

電話本局一〇三六 電報略號ヤマフ

著者 遠藤隆吉

發行者 合資會社 富山房

東京市神田區裏神保町九番地

代表者 坂本嘉治馬

東京市神田區裏神保町九番地

印刷者 石井要藏

東京市神田區三河町二丁目十四番地

印刷所 合資會社 丸利商會

東京市神田區三河町一丁目十四番地

類書學哲免發房山富

文學博士 松本亦太郎 木村鷹太郎兩先生共譯

プラトーン全集

本書に對する諸大家并に各新聞の批評及び本書の内容等は郵券二枚送附あれば贈呈す
全五册(每册)總紙數六千頁
定價 金貳圓五拾錢
第一卷發行

▲偉大なる我、プラトーンの思想!! ▲プラトーンの思想は世界思想史の源泉也。▲プラトーンは宛然一個の小世界也。耶蘇の思想、佛敎の思想、文學科學の精神、殆ど世界に於ける凡ての思想を包有せざるはなし。▲歐米諸國に於ける所謂政治學、文學論、藝術論、愛情論、倫理學、教育法、皆殆どプラトーンに出でざるものなく、又かの所謂國家主義、社會主義、詩文學、論理學、言語學、修辭學、神祕學、實證學、倫理學、皆殆ど主義、心理學等の發展を計れば、皆遠くプラトーンに於けるに未だ此の書の翻譯ありしは、是を以てプラトーン學、實證學、倫理學、皆殆ど集り殆んど世界の文明諸國に翻譯されざるはなし。然るに我が國今日に至るまで未だ此の書の翻譯ありしは、是を以てプラトーン學、實證學、倫理學、皆殆ど文は平明簡潔、而も眞摯著實を旨とし、原著の一字一句をも荷もせず、實に本邦に於ける空前の大翻譯也。

文學博士 中島力造先生著 (再版)

菊判全二册 定價六拾七錢 郵稅八錢

同 倫理學說十回講義

菊判全一册 定價九拾錢 郵稅拾錢

文學博士 桑木嚴翼先生譯 (七版)

菊版全一册 定價八拾錢 郵稅八錢

哲學館講師中島德藏先生講述 (四版)

菊版全一册 定價九拾錢 郵稅十二錢

山本 良吉先生著 (三版)

倫理學史

菊判全一册 定價拾錢 郵稅四錢

文學博士 中島力造先生譯 (再版)

ラッ ド氏 認識論

菊判全一册 定價七拾錢 郵稅八錢

文學士 有馬祐政先生著 (再版)

日本倫理要論

菊判全一册 定價六拾五錢 郵稅六錢

文學博士 蟹江義丸先生著

倫理叢話

菊判全一册 定價六拾五錢 郵稅六錢

類書學哲免發房山富

英國哲學博士 マッケンジ 氏原著 兵庫縣第二師範學校長野口援太郎先生譯述

倫理學精義

全一册

三版 菊判洋裝紙數七百餘頁 定價金壹圓四拾錢 小包料十五錢

本書は高尚なる學說を平易親切に説明したる點に於て、此書の右に出づる完全なる倫理學書なしとて歐米の學界を震蕩し無比の高評を博せし名著なり。譯文明暢、難解の字句には註解を施しあれば獨修用受驗川並に師範中學校員の參考書として適切也。

文部省總務局御藏版 正價金拾圓

日本教育史資料

全九册

附圖縱二尺六寸横一尺七寸石版刷十七葉 四六判二倍五號活字紙數六千三百餘頁 二十四行五十三字詰

エール大學哲學博士スクリプナー先生原著 文學博士元良勇二郎先生校閱 文學士塚原政次先生譯述

實驗新心理學

上卷 定價金九十五錢 郵稅金十二錢

下卷 定價金壹圓四拾錢 郵稅金十四錢

全部 小包料拾錢

全二册 菊判六百四拾餘頁 拾餘圓 郵稅拾錢 入

文學博士 井上哲次郎先生著

巽軒論文集

初集四拾五錢 二集五拾五錢 郵稅各六錢

前群馬縣師範學校校長 矢島錦藏先生著

倫理學講義

定價六拾錢 郵稅六錢

京都府師範學校教諭 原安馬先生著

校堂訓話

全一册 定價廿五錢 郵稅四錢

文學博士 故西村茂樹先生著

再自識錄

全一册 定價拾錢 郵稅四錢

文學士 澤柳政太郎先生著

教育者の精神

菊判全一册 正價金廿錢 郵稅金四錢

文學博士 芳賀矢一先生著

國民性十論

本書は、國文學史上の事實を根據とし、國民の風俗、習慣、嗜好の變遷に着目して、日本國民の特質を平易明快に叙述せられたるもの也。

富山房發兌哲學書類

文學士遠藤隆吉
先生 新著

支那思想發達史

菊判紙數約七百頁
定價金壹圓五拾錢
小包料金拾五錢

上下五五千載、支那思想發展の跡を尋ねれば、興會湧くが如く趣味盡きざるものあり。著者專攻の學識抱負を傾倒し來り之を組織的に叙述論評す、彩華燦發、光芒陸離、之を哲學史と見る固より大に可、一種の文學史、文明史と見る又固より不可なきなり。

文學博士 元良勇次郎先生講述

心理學十回講義

全一冊 定價金六拾錢 郵税金六錢

文學博士 元良勇次郎先生合譯

心理學概論

全三冊 定價各冊五拾五錢 郵税金六錢

文學士 塚原政次先生抄譯

心理學講演

全一冊 定價金五拾錢 郵税金六錢

文學士 尾田信忠先生譯 (四版)

初等心理學

全一冊 定價金八十錢 郵税金八錢

文學博士 元良勇次郎先生校閱

兒童心理學

全一冊 定價金廿五錢 郵税金六錢

山本信行先生著

倫理論語抄

全二冊 定價廿六錢 郵税金拾錢

獨逸キルヒネル先生著

幾氏教育學

全一冊 定價金九拾錢 郵税金拾錢

文學士 塚原政次先生譯

兒童研究

定價一部金拾錢六冊前金五十七錢十二冊前金一四十四錢郵税金一冊一錢

教育家も父母も必ず本誌を讀まざるべからず

心理倫理教育哲學を研究するもの亦本誌を讀ざるべからず

法學士 有吉忠一先生著

小教育制度

全一冊 定價金四拾錢 郵税金六錢

桑野禮治先生譯述

習慣教育法

全一冊 定價金廿五錢 郵税金十錢

文學博士 井上哲次郎先生著

巽軒論文三集

全一冊 定價金廿五錢 郵税金十錢

近日常發行

興味論

全一冊 定價廿錢 郵税金四錢

笹倉新治先生著

本書は現時教育の進運に資し品質修養の指針に供せむと企圖せられたるもの、教育並に修養に關して興味を攻究せむと欲する人士をよ一讀あれ。

志賀重昂先生著

地理教科書

地理學者として有名な志賀先生が熱心に著作せられたるもの、社會の發達に伴隨し、新興國民の體度に攻へ興味如湧の中に地理學を學修せしめんとて經營多年茲に大成を告げたるもの也。

正訂新撰地文學

全一冊

洋裝菊判紙數二百拾餘頁、定價壹圓、郵税金十錢

中學程度以上の地文研究者及文部省檢定受験者等の好參考書にして今訂正修補を加へたるもの也

正訂新撰地理

日本部 本文金六拾錢 附圖金四拾錢
外國部 本文金六拾五錢 附圖金三十五錢

新撰中地文學

菊判紙數三百餘頁 定價金壹圓二拾錢 郵税金十二錢

新撰小地文學

全一冊 定價五拾錢 郵税金六錢

近世地文學教科書

全一冊 定價五拾錢 郵税金六錢

日本篇 地文篇 外國篇

理學士山上萬次郎先生著 (第四版)

新撰大地誌

國外部 完結

全三冊定價各一圓卅錢小包各十五錢總紙數千頁

▲卷一 アジア部(完結)
▲卷二 ヨーロッパ部(完結)
▲卷三 アフリカ、オシアン、南北アメリカ部(完結)

新撰大地文學

▲一、水圈學及氣圈學
▲二、動的海洋學
▲三、動的海洋學
▲四、宇宙開闢論
▲五、地磁學
▲六、地質學
▲七、地質學
▲八、地質學
▲九、地質學
▲十、地質學

一致日本地理

菊判五百餘頁 定價金廿五錢 郵税金六錢

普通全編 六書第一

富山房發兌地理學書類

志賀重昂先生著
地理教科書
正訂新撰地文學
正訂新撰地理
新撰中地文學
新撰小地文學
近世地文學教科書

日本篇 地文篇 外國篇
新撰大地誌
新撰大地文學
一致日本地理

富山房發兌地理學類書

編輯主任 理學士小川琢治先生

地學叢書

▲地理學一般に關する部門(一)地理學の概念并地理學發達史(二)旅行法(三)地殼(四)海(五)經濟地理(六)人種(以下略)▲地質學其地の諸科學に關する部門(一)南北兩極(二)亞刺比亞(三)英國(四)アルプス(五)合衆國(六)琉球(以下略)▲地質學其地の諸科學に關する部門(一)地質學の概論(二)地質學の歴史(三)地質學の分類(四)地質學の調査(五)地質學の應用(六)地質學の教育(以下略)▲地質學其地の諸科學に關する部門(一)地質學の概論(二)地質學の歴史(三)地質學の分類(四)地質學の調査(五)地質學の應用(六)地質學の教育(以下略)

增訂地質學教科書

菊列紙數
定價金壹圓
郵稅金十錢

地質學は地文學の元祖ともいふべきものにして、博物學科中人智を開發するに最も適當の學科なり加之其實地應用も極度に廣く、鐵山、農林、土木、山林等の如き、苟も地體に關する各般の事業にして、斯學の學理を講ずるは、なし本書名は教科書といふと雖、その實は邦文地質學書のオソリチテたるを失はば、蓋し、斯學研究者唯一の寶典也。

(文部省檢定済)

地文學教科書

菊列全一册
定價金四拾錢
郵稅金十錢

地文學簡易教科書

菊列全一册
定價金四拾錢
郵稅金六錢

地質學簡易教科書

菊列全一册
定價金四拾錢
郵稅金六錢

(近刊)

地學の範圍は浩大にして分科雜多也。一部の書一符の文のよく盡くす所非ず。その門に入りその學に上らんとするもの誰か望洋の嘆なからんや。本書は地理學及地質學其他の諸科目に涉り各細目に就き最も明白簡易の文を以て本邦在來の教科書以上の専門的知識を鼓吹せんと試みたる嚆矢也。

世界通誌

菊列三册
定價金三拾錢
郵稅金四錢

著者は其專攻の學識と抱負とを以て屢々歐亞の地を跋涉し研鑽多年斯學に於ける造詣益々深し今此一大幅を作る其地學に於ける近時の大著たることを推して知るべきなり。

應用地質學

菊列全一册
定價金五拾錢
郵稅金六錢

地質學の發多しと雖、孰れも學理の研究に走り簡易應用を主としたるものなし、本書は此缺を補はんとて地質を應用する工、礦、土木等の事業に従事せらるる諸君の參考に供するもの也。

日本地理問答地文學問答 世界地理問答地質學問答

定價每册金十二錢 每册 郵稅金四錢

富山房發兌地理學類書

富山房編輯部編纂

最新日本地圖

版三

石版色別刷縦八寸横一尺二寸大形全一册
上製金壹圓並製金八拾錢郵稅上製拾貳錢並製八錢、
本書は七年の星霜を閱して漸く大成したるもの彫刻の精巧區劃の嚴正今誇稱せず運輸交通殖産工業都府の盛衰土地の高低等地圖に必要なるもの一として網羅せざるなし實業家旅行者漫遊家の必携用品たるは勿論毎冊必す先づ此地圖を備ふべき也。

理學士吉田弟彦先生校閱富山房編輯部編

世界新地圖

日本新地圖

本美頗

定價各金四拾五錢郵稅各六錢石版彩色刷

此圖は學生旅行家携帶の便を計り附録は地理大要各百數十頁を添へ相對象せしむる等用意周到の最新式其地圖也中學程度學生諸君の參考として實業家子弟の必携として最も妙なり。

理學博士橫山又次郎先生著 (五版)

地球之過去及未來

金廿五錢
郵稅四錢

地球の早晚滅亡すべき理由を學理上より論破せるもの一説再論釋凄然たらざるを得ざらしむるものあり。

理學博士橫山又次郎先生著

地文地圖

彩色石版刷
菊列大形全一册
定價八拾錢
郵稅八錢

地文學修の傍ら本圖を參考すれば趣味の益々加はるものありん。

日本群島地文圖輯覽

全六册
定價金貳圓

本邦地文に關する諸現象を攝羅し之を陸界水界氣界生界に分ち全六枚を以て完結す、蓋し出版界空前の一大地文圖也。

三人生地理學

地圖七枚寫眞三枚
挿畫壹百餘個
紙數菊列千餘頁
定價貳圓小包五錢

本書は其名の表はすが如く山河湖沼海島氣候生物其他四圍の地理的現象と人生の物質的及精神的諸般の方面との關係を細説し、以て地理、地文、商業地理、政治地理、國勢地理、軍事地理、宗教地理、都會地理、文明地理等の原則を研究したるもの、叙述精緻立論警拔蓋し本邦破天荒の一新快著也。

富山房編輯部編纂

萬國地理

全地圖挿入定價廿錢
郵稅四錢

萬國形勢指掌全圖

縱一尺三寸
橫一尺六寸
大形美本

▲定價金壹圓并拾錢小包料量目四百外以内ノ割
此圖は漢文を以て現今各國の最新調査により横田先生の編輯に成りたる者、匪僅正確、地圖精明、加之附録に各國の比較統計二十餘頁を添ふ大清國民必携之寶珍也。

合資富山房編輯部編纂

監修 芳賀三昧 尾崎紅葉

監修 坪内雄藏先生

監修 坪内雄藏先生

監修 坪内雄藏先生

監修 坪内雄藏先生

監修 坪内雄藏先生

監修 坪内雄藏先生

農學博士 横井時敏先生著

博士學士 諸大家校閱
歸山信順先生講述

言文普通學全書

袖珍名著文庫

通俗世界文學

少年世界文學

博物叢書

言文農藝叢書

日用理化叢書

高等小學卒業程度の學力で普通學の全般實業家須知の諸課目を理解獨修し得るもの

定價 全書 五冊 九角 五冊 七角 五冊 五角 五冊 四角 五冊 三角 五冊 二角 五冊 一角 五冊 五分

詩歌小説戲曲史傳記行隨筆雜論等每編國文學に關する珍本稀籍を網羅す

定價 全書 五冊 九角 五冊 七角 五冊 五角 五冊 四角 五冊 三角 五冊 二角 五冊 一角 五冊 五分

健全にして有益なる家庭の好讀物、趣味教育に資すべし現代唯一の少年讀本

定價 每編金拾貳錢郵稅每編金四錢

自然界に於ける最も興味ある事柄を最も巧妙なる談話體を以て解説したるもの

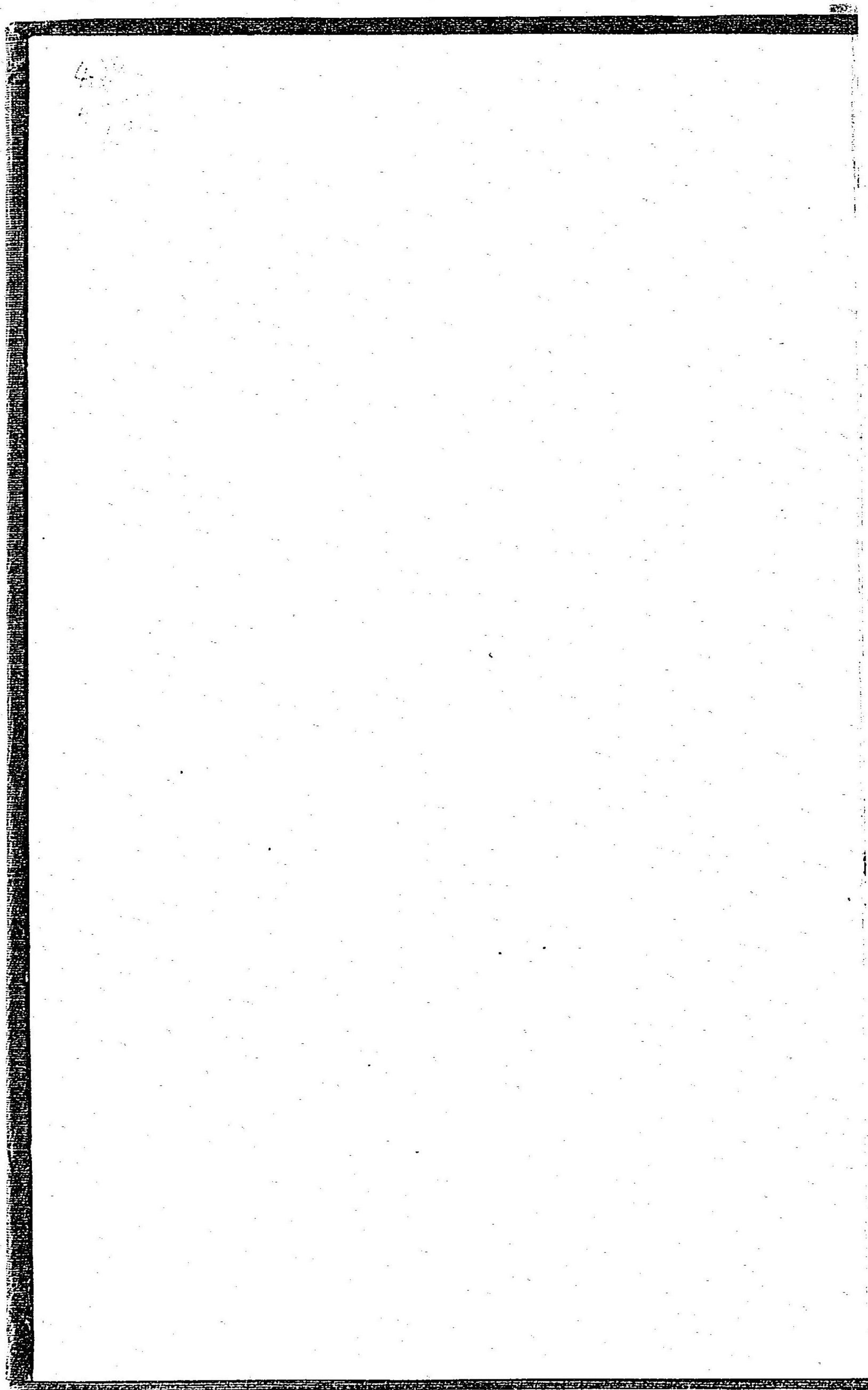
定價 每編金拾五錢 郵稅 每編金四錢

農に關する須知の事項を網羅す農業國に生れたる國民は必ず一讀せよ

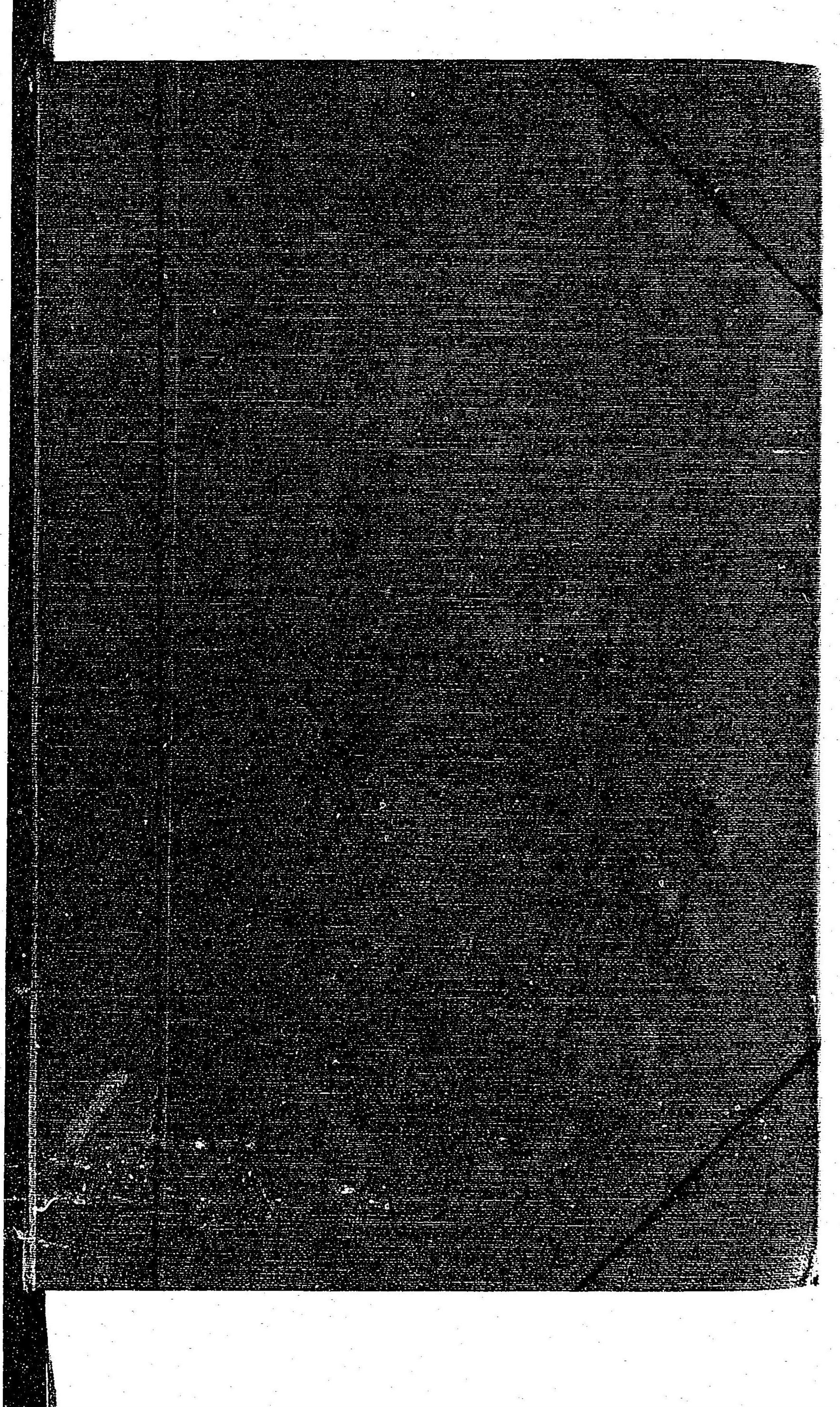
定價 全書 五冊 九角 五冊 七角 五冊 五角 五冊 四角 五冊 三角 五冊 二角 五冊 一角 五冊 五分

日常目撃する所の興味ある理化的事項を最新の學理により通俗的に面白く分り易く講述したるもの

定價 每冊廿五錢 全部十冊金二圓廿錢郵稅每冊四錢



CL
NO. 12030



M

008247-000-6

122.02-E65s

支那思想發達史

遠藤 隆吉/著

M37

AAC-0129



